

令和4年度（2022年度）
社会調査実習報告書
「大学生の生活と意識に関する調査」

東京成徳大学 応用心理学部
臨床心理学科 社会調査実習受講者

目次

1.	自己開示の度合いと友人関係の満足度の関連性についての調査	1
2.	大学生の過去の恋愛における恋人に求める条件	6
3.	夏の暑さが与える感情と行動の変化	10
4.	推しの有無によるポジティブさの差異に関する調査	13
5.	大学生のマスク事情に関する調査	17
6.	大学生における授業形態の違いによる実態調査	20
7.	大学生のマスクに対する意識調査	25
8.	SNS での交友関係と性格の関連についての調査	30
9.	大学生の日常生活における「自己評価」を左右する要因について	34
10.	大学入学後のリアリティショックに関する調査	39
11.	大学生の外見に関する意識調査	47
12.	大学生の就活事情に関する調査	52

自己開示の度合いと友人関係の満足度の関連性についての調査

20C174 平弥暖、20C180 地場つかさ

問題と目的

学生にとって学校で適応するためにはそこでの友人関係が良好であることは非常に重要である。そのために、相手を優先するコミュニケーションを多くとることで、学校での居心地の良さや他者からの受容を獲得していると考えられている。しかし、過度に友人に対して気を遣うようなコミュニケーションは、友人関係満足度を低下させ、劣等感を生じさせることにもつながる可能性がある（本田、2016）。

またこれまでの友人関係満足度に関する研究では、直接的関連の要因になりやすいのは、「他者信頼」や、社会志向性といったように、他者に向かった気持ちや振る舞い方が、より重要であると推察される（姜・南、2014）。

対人関係を築くプロセスの中で他者信頼や社会におけるコミュニケーション、対人関係等様々な先行研究では「自己による開示」が着目されつつある。

自己開示とは、self-disclosure の訳であり、自己を他者に開くことである。この用語を初めて用いたジェラードによれば、自己開示とは個人的な情報を他者に知らせる行為であるとしている。このことから自己開示という概念は、パーソナリティの開放性に関わるものといえる（榎本、1997）。コミュニケーションの手段として利用され、親密関係を築く上で基盤につながる自己開示と友人関係の満足度の関連性は人間関係への着目において重要な問題といえるだろう。これらの観点から「自己開示」と「友人関係の満足度」に注目する。

そこで本研究では自己開示と友人関係の満足度の関連を検討するために、自己開示の度合いと友人関係の満足度の信頼性、また自己開示の程度に性差はみられるのかを調査する。

方法

調査対象者

社会調査実習履修者 68 名（男 28 名、女 40 名）に調査票を配布した。そのうち 55 名（男性：19 名 女性:36 名）から回答を得た。

調査時期

調査は 2021 年 10 月 13 日から 11 月 10 日の 28 日間。

調査手続き

Microsoft Forms を用いて、調査票を配布、回答を回収した。

調査内容

質問は、フェイスシート(1年齢 2性別)、(1)友人関係の満足度についての質問項目(計3問)、(2)自己開示の度合いについての質問項目(計8問)の3種類とした。

質問内容と質問項目を以下に記す。

(1)自己開示の度合いについて

自己開示の広がりと深さを明らかにするため、計11問のオリジナル尺度を用意し、「はい」「いいえ」の2件法で回答を求めた。

質問内容は『自ら悩みを打ち明けることが出来る』、『家庭環境を言える』、『自分のコンプレックスや短所について話せる』等、その他類似した自己開示の広がりや深さに応じた質問項目を提示した。なお、質問項目の1問目から11問目にかけて自己開示の深さを段階分けしており、項目を進むにつれて自己開示の深さが増すよう作成した。

(2)友人関係の満足度について

友人関係の満足度について明らかにするため、「2人でいても苦にならない友人を思い浮かべて答えてください。」と教示内容を示し、質問3項目についてそれぞれ「あてはまる(4点)」～「あてはまらない(1点)」の4件法で回答を求めた。

質問内容は『友人関係に満足している』(以下、友人関係の満足度)、『今の交流関係で満足している。これ以上関係性を広げる必要はない』(以下、交流関係の拡大性)『友人を信頼している』(以下、友人への信頼度)の計3項目を用意した。

結果

いずれの項目においても性差に有意差は見られなかった。

(1)自己開示の度合いについて

自己開示の8項目について α 係数を算出したところ、0.679であり許容範囲内であることが分かった。そこで、8項目の合計得点を自己開示の度合いの合計得点とした。(以下、自己開示の合計得点)また自己開示の合計得点の平均値と標準偏差を算出したところ、(avg:6.727/SD:1.581)となった。

全55件の回答のうち自己開示の質問8項目の中で「はい」と回答した人が50人を超えた項目が4項目、越えなかった項目は4項目であった。越えなかった項目において最も回答が割れたのが自己開示の深さが2番目に高い『友人の前で泣いたり怒ったり感情をさらけ出せる。』という項目であった。「はい」が37件、「いいえ」が18件と回答者の三分の一近くがさらけ出すことに抵抗を感じるということが分かった。

(2)友人関係の満足度について

全55件の回答を以下のグラフに示した。(Figure 1)『交流関係の拡大性』の項目では1人無回答がいた。

これらの結果から 3 項目全てにおいて「あてはまる」、「ややあてはまる」と回答した人が約 8 割近くいることがわかった。3 項目の中で最も差が見られたのは『友人関係の満足度』であり、逆に差があまり見られなかったのは『交流関係の拡大性』であった。

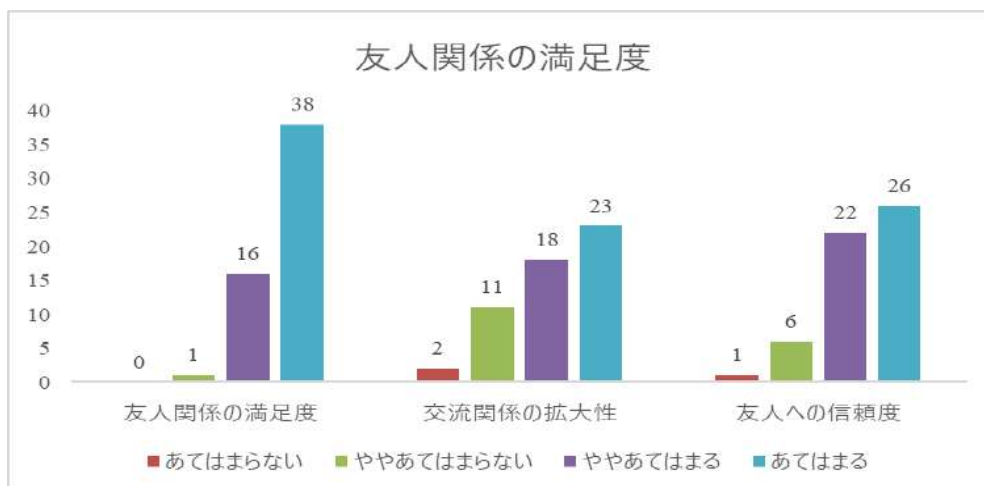


Figure 1 友人関係の満足度に関する 3 項目の統計 (N = 55)

(3) 友人関係の満足度 3 項目と自己開示合計得点の相関係数

Table 1 3 項目と自己開示合計得点の相関分析 (N = 55)

	友人関係の満足度	交流関係の拡大性	友人への信頼度	自己開示	平均値	標準偏差
友人関係の満足度	1.000				3.673	0.511
交流関係の拡大性	.251 +	1.000			3.148	0.878
友人への信頼度	.431 **	.123	1.000		3.327	0.747
自己開示	.071	-.170	.407 **	1.000	6.727	1.581

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

また友人関係の満足度についての 3 項目と自己開示の合計得点(一人一人の回答を足し合わせた得点)について相関性を調べるため相関分析を行った。さらに平均値と標準偏差を示した統計が上の表である。(Table 1)

平均値や標準偏差はそれぞれ、『友人関係の満足度』(avg:3、673/SD;.511)、『交流関係の拡大性』(avg:3.148/SD:.878)『友人への信頼度』(avg:3.327/SD:0.747)となった。

Table 1 の結果から『友人を信頼できる。』という項目と自己開示の合計得点において中程度の正の相関が見られた。一方で他の 2 項目については相関性が見られなかった。

中程度の正の相関が見られた『友人への信頼度』という項目において自己開示の合計得点との散布図を作成したところ、以下の図のようになった。(Figure 2)

自己開示の合計得点が 3 の時、友人への信頼度は 1(あてはまらない)という結果となり、合計得点が高くなるにつれて友人への信頼度も比例をし、上がっていくことが分かった。一方で友人への信頼度が 3(ややあてはまる)にも関わらず、合計得点は 1 という結果が見られたことも分かった。

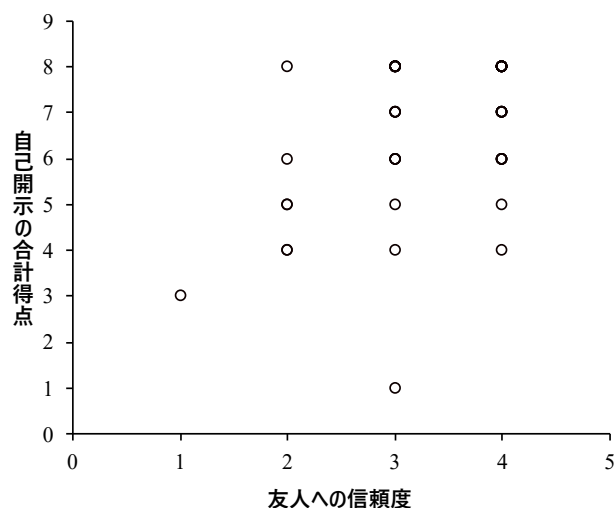


Figure 2 友人への信頼度と自己開示の合計得点の散布図(N=55).

考察

本研究では、自己開示と友人関係の満足度の関連性は人間関係への着目において重要な問題といえるという推察から、自己開示と友人関係の満足度の関連を検討するために、自己開示の度合いと友人関係の満足度の信頼性、また自己開示の程度に性差はみられるのかを調査した。

研究の結果、(1)では、自己開示の段階分けが大きく意味をもったと考えられる。既存尺度ではなくオリジナルの尺度を用い、かつ段階分けも主観的に行われたことから、結果にばらつきが見られるとは推測していた。結果では先述した通り、自己開示の深さが2番目に高いと考えていた項目から一番差が見られた。対して一番自己開示が深いと思われる項目においては51人が「はい」、4人が「いいえ」という結果となった。このことから自己開示に関しての広がりや深さに応じた段階分けは主観的な要因が大きく関わっているのではないかと考えた。

続いて(2)では、友人関係の満足度はほとんどの人が今の友人関係に満足していることが結果から読み取れる。交流関係の拡大性においてはダブルバーレル質問となってしまったため効果的な回答ではなかったといえる。交流関係に満足しているのか、これ以上関係性を広げる必要はないのか、分けて考えた時にどちらに結果が左右するのか今回の研究結果からは読み取ることができなかった。

そして(3)の結果から本研究の目的である友人関係の満足度と自己開示の関連性が少なからず一部で見られたと考えられる。質問3項目の中で『友人への信頼度』という項目から中程度の正の相関が見られた。すなわち友人関係に満足していればしているほど友人への信頼度も上がっているといえる。一方で先述した通り、友人への信頼度をそれなりに感じていたとしても、その信頼を信じ自己を出すという得点が低かったという結果も見られたのは「信頼度」＝「自己を出す」という概念を別と捉えるべきなのか、本研究からは

サンプルが少なかったこともあり見出すことはできなかった。

本研究の課題点や至らなかったところとしては、質問の中にダブルバーレル質問が混じってしまったことだ。オリジナル尺度を作成する際には適切な質問であるかどうかを確認し、改善に努めていきたい。

本研究の今後の展望として性差についての統一とする。最初に「2人でいて苦にならない友人を想像してください。」と教示したことから恐らく被験者は浮かべる友人として「同性の友人」を思い浮かべた人が多いと推測する。実際、榎本(1997)の相手別に見た自己開示に関する研究結果では開示しやすい相手の順位として、男女ともに同性の友人が1位となっているためである。本研究において全体的に自己開示度が多く見られたのはこのことが関係していると考えられる。今回は性差において有意差が見られなかった背景の一つに男女の比率が関係しているのではないかと推測した。榎本(1997)では先ほどの研究結果に対し、女子の方が自己開示度が高いという結果が報告されている。今回の被験者において女性36名、男性19名とおおよそ2倍近く差があることから男女の性質にも注目を向けて研究を進めていきたい。

参考・引用文献

榎本博明(1997). 自己開示の心理学研究、北大路書房

姜信善・南朱里(2014). 友人関係満足と信頼感および個人志向性・社会志向性との関連－性差に焦点を当てて－、人間発達科学部紀要、第9巻1号、32.

本田周二(2016). 友人関係における動機づけと友人とのコミュニケーションおよび精神的健康との関連、人間生活文化研究、26、579-580.

大学生の過去の恋愛における恋人に求める条件

20C111 石垣 麗緒菜、20C183 富澤 悠雅
20C186 中島 菜々子、20C192 野間 大貴

問題と目的

近年、SNS が多く普及されるようになったとともに、新型コロナウイルス感染予防のため、対面で行われていた仕事や授業、会議や飲み会などが、オンラインで行われるようになり、インターネットを介してのコミュニケーションが社会に広く浸透し始めている。その影響を受け、恋愛面でも、様々な出会いの場や恋人関係の形が増えていき、それと比例するかのように、インターネット上のコミュニケーションでの異性間の悩みや不安も増え始めている傾向にある。実際、多くの世代で利用されている LINE という連絡アプリでの男性と女性の連絡手段としての認識や重要視の違いによる喧嘩やその心理の解説等の記事が多くネット上に存在している。

このように今社会では、様々な恋愛の方法やその悩みが存在しているため、恋愛経験における恋人に求める条件も様々である今だからこそ過去の恋愛経験によって違いが生じるのではないかと考え、本調査を実施した。

方法

調査期間

2022年10月12日～11月3日。

調査対象者

社会調査演習履修者68名に調査票を配布した。そのうち、50名（男性17名、女性33名）から回答を得た。

調査手続き

Microsoft Forms を用いて、調査票を配布、回答を得た。

調査内容

過去の恋愛における恋人に求める条件について尋ねた。質問は、フェイスシート（性別、恋人の有無）と以下の質問から構成されている。

- ①過去の恋愛経験について尋ねるため、「今まで付き合った人数は何人ですか？」を0人、1人、2～3人、4～5人、5人以上の5件法、「今まで1番長く付き合った期間はどれくらいですか？」を1か月未満、1～3か月未満、3～6か月未満、6～9か月未満、9か月～1年未満、1年以上の6件法の2項目で。回答を求めた。
- ②恋愛をすることに対する意識を尋ねるため、「恋人がいた方がいいと思う」をはい、い

いえの2件法で質問し、そう答えた理由を自由回答法で回答を求めた。

③恋愛に関する価値観について尋ねるため、「恋人がいることでのメリットとして感じるもの」を頑張る理由ができる、楽しい時間を過ごせる、癒される、自己肯定感が上がる、イベントや行事がより楽しくなる、その他を複数回答法、「恋人がいることでのデメリットとして感じるもの」を出費が増える、一人の時間が減る、不安や悩みが増える、異性と気軽に遊べなくなる、その他で複数回答法、「恋人に求める返信速度はどのくらいですか？」を回答とそう答えた理由ともに自由回答法で、「恋人に求める条件を優先順に並べてください」を性格、一般常識、価値観、清潔感、顔、経済力を完全順位法で質問し、そう答えた理由を自由回答法、「どのようなときに浮気だと思えますか？」を、異性と目を合わせる、異性と連絡を取る（業務連絡は除く）、異性とくだらない話を続ける、異性と二人で話す、異性と電話で話す、異性と軽いボディタッチ、異性と二人でどこかに出かける、異性と二人で飲みに行く、異性の家に遊びに行く、異性とお泊り、その他で、段階評定法の計7項目で回答を求めた。

結果

1). 過去に付き合った人数が0～1人（18人）と2人以上（32人）で区分し、恋人がいた方がいいと思うかについて比較した所、過去に付き合った人数が2人以上のグループのほうが「はい」と答えた割合が多いことが分かった。その結果を示したものが以下のグラフである。（図1）（図2）

※（以降過去に付き合った人数が0～1人をAグループ、2人以上をBグループとする）

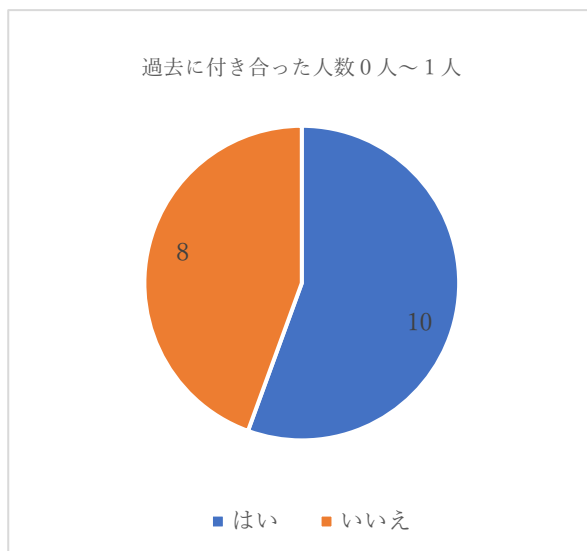


図1 恋人がいた方がいいと思うか

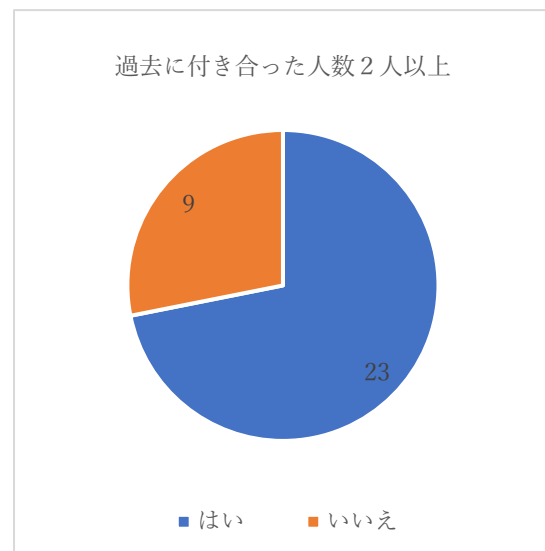


図2、恋人がいた方がいいと思うか

Aグループでは、はいと答えた人の中でも「将来的に欲しい」やモチベーション向上のために必要だという理由が多い中、Bグループでは、「楽しいから」「生活が充実する」と

いったメリットがあるから、といった理由が多く見受けられた。①「恋人がいることでのメリットと感じるものをすべて選んでください」②「恋人がいることでのデメリットと感じるものをすべて選んでください」の質問項目でも複数回答法を用いて回答を求めたが、Aグループは、平均回答数が①2.22②2.16であったことに対して、Bグループは①3.43②1.93と、AグループよりBグループのほうが恋人がいることによるデメリットを感じるものは少なく、メリットだと感じる項目数が多いことが分かった。

2)どこからが浮気だと思うかについて質問したところ、Aグループの異性と二人でどこかに出かけるの項目が多く回答された。その他の項目については佐賀見られなかった。

(図3)(図4)

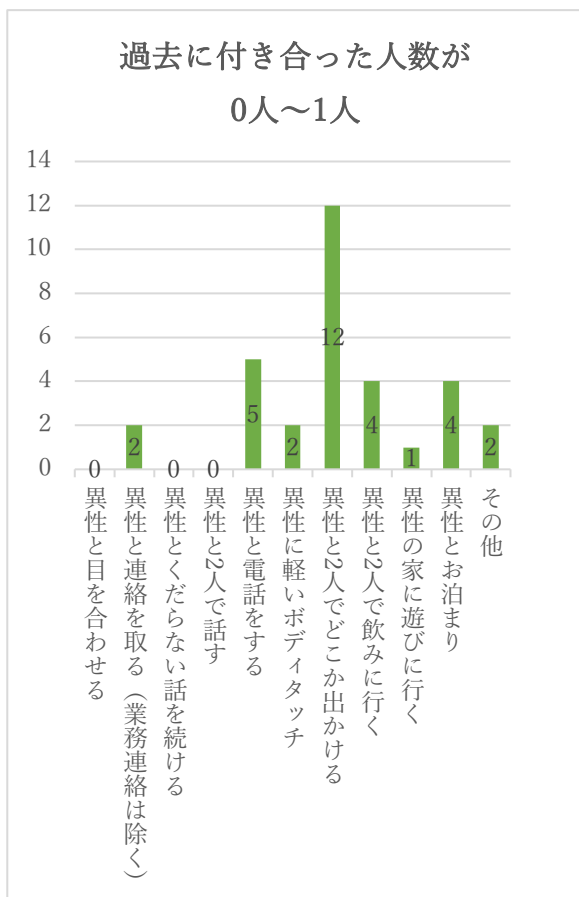


図3 どこからが浮気だと思うか

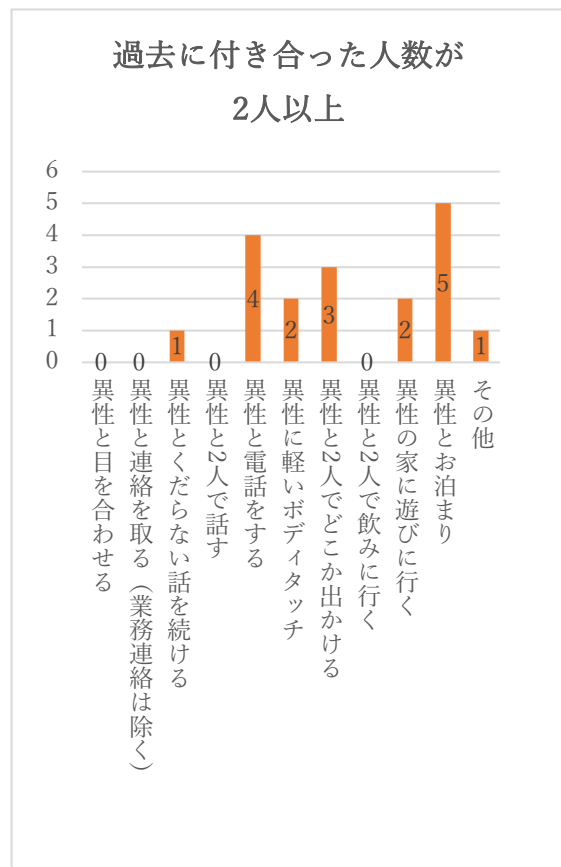


図4 どこからが浮気だと思うか

3)「恋人に求める返信速度はどれくらいですか?」の回答では、早くて5分以内、長ければ1週間に1回など様々で、その理由も相手のプライベートを優先させたものや、寂しい、不安や心配になってしまうなどの結果が見られたが、AグループとBグループで比較した際の違いは見られなかった。

4)「恋人に求める条件を優先順に並べてください」の回答では、意見や条件の違いは全体を通して様々であったが、過去の付き合いの人数で区分した A グループ B グループでの違いは見られなかった。

考察

今回の調査の結果から、過去に付き合いの人数が多い B グループのほうが A グループよりも、恋人がいた方がいいと感じる割合と、恋人がいることをメリットと感じるものが多く、デメリットと感じるものが少ないことが分かった。しかし、浮気だと感じるラインや恋人に求める条件、返信速度ともに、意見は様々で、過去に付き合いの人数の違いが恋人に求める条件の違いに必ずしもつながっていないことが分かった。

過去の恋愛経験が多くある人は、必然的に過去の恋愛での出来事が今の恋愛に対する価値観の理由や原因に結び付いていることが多いため、浮気だと思うラインや求める連絡速度が異なることは予測ができる。しかし、A グループの回答結果を見てみると、返信速度では 1 日に 1 回、24 時間以内に 1 回などが多い中で、1 時間半や 5 分以内といった意見があったり、浮気のラインも B グループの人たちと意見があまり変わらない。それは、自分の恋愛経験が影響する中で、それにプラスして社会の中には、恋愛でのよくある不安や悩み、嫌な体験談等の記事が多く存在し、こういう特徴がある人はこういう人だからやめた方がいいなど、様々な情報に触れる機会が増えてきていると考える。実際、そういった記事のおかげで悩みが解消されたり、迷いが確信に変わり、前に進むきっかけになっているものがあることも事実である。

参考文献

中沢 佐智子 (2014). 男女の恋愛実態と恋愛観から観る結婚について

<https://www2.kokugakuin.ac.jp/~ogiso/semi/2014/nakazawa.pdf>

男女の恋愛観の違いとは？価値観のズレを乗り越えて円満な関係になるコツを解説

Smartlog <https://smartlog.jp/149329>

マイナビウーマン 恋の悩みランキング TOP10【プロの解決策付き】

<https://woman.mynavi.jp/article/190327-6/>

夏の暑さが与える感情と行動の変化

20C106 荒井愛花、20C125 大川陽貴
20C128 岡村涼楓、20C169 須藤和奏

問題と目的

近年、地球温暖化が問題視されており「気候変動に関する政府間パネル (IPCC).」によれば、今後 100 年に地球全体で 1.4~5.8°C の平均気温の上昇が予想されている。地球温暖化は地球の大気中に含まれる温室効果ガスが紫外線などの短い波長の光を通過させ、赤外線などの長い波長の光を吸収することによって引き起こされる。気温の上昇によって海水の膨張や極地の氷の融解による海面の上昇が起これ、生態系や食糧生産への悪影響が懸念されている。さらに、地球温暖化は健康にも影響を及ぼす。途上国では低栄養と下痢性疾患があり、先進国ではオーストラリアでは干ばつや森林災害が引き起こされている。以上から、気温や天気が人の心身に影響を与えると考えられるため本研究では夏の暑さが自身の感情と行動にどのような変化をもたらすかについて調査することを目的とする。

方法

調査方法

Microsoft Forms を用いて、調査票を配布、回答を得た。

調査対象者

社会調査演習履修者 68 名に調査票を配布した。そのうち 49 名 (男 19 名、女 30 名) から回答を得た。

調査時期

10 月 20 日~11 月 10 日。

調査内容

晴天時と雨天時に起こる感情の変化についてそれぞれ尋ねるため、晴天時と雨天時に起こる感情を「怒り」「活気」「抑うつ・落ち込み」「緊張」「疲労感」「穏やか」「焦燥感」「焦り」「その他」の 9 つから回答を求めた。屋外での行動を尋ねるため、晴天時の活動について「買い物に行く」「体を動かす」「日が当たらない涼しい場所に出かける」「海やプールに行く」「花火をする」「その他」の 6 つから回答を求めた。また、室内での行動を尋ねるため、雨天時の活動について「映画を観る」「本を読む」「冷たいものを食べる」「ゲームをする」「友達と話す」「その他」の 6 つから回答を求めた。

結果

有効回答数は49名（男19名、女30名）であった。

晴天時の感情について「怒り」と答えたのは15人、「活気」と答えたのは11人、「落ち込み」と答えたのは12人、「緊張」と答えたのは1人、「疲労感」と答えたのは29人、「穏やか」と答えたのは8人、「焦燥感」と答えたのは5人、「焦り」と答えたのは3人、その他が1人であった。（図1）。

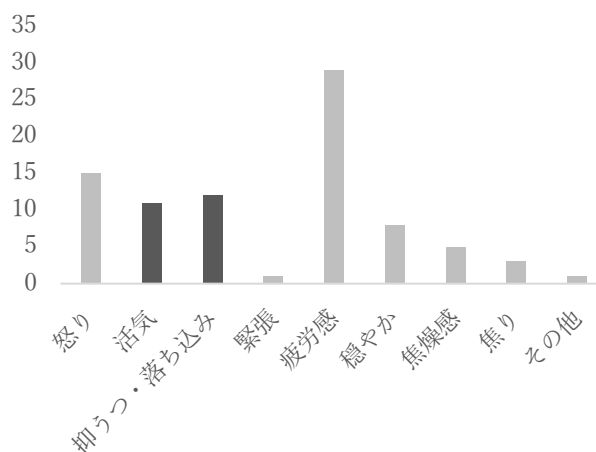


図1 晴天時に起こる感情

雨天時の感情について「怒り」と答えたのは11人、「活気」と答えたのは1人、「落ち込み」と答えたのは30人、「緊張」と答えたのは0人、「疲労感」と答えたのは22人、「穏やか」と答えたのは10人、「焦燥感」と答えたのは1人、「焦り」と答えたのは0人、その他が1人であった。（図2）。

晴天時と雨天時を比較すると、晴天時は雨天時に比べて「活気」の感情が高く「抑うつ・落ち込み」の感情が低かった。

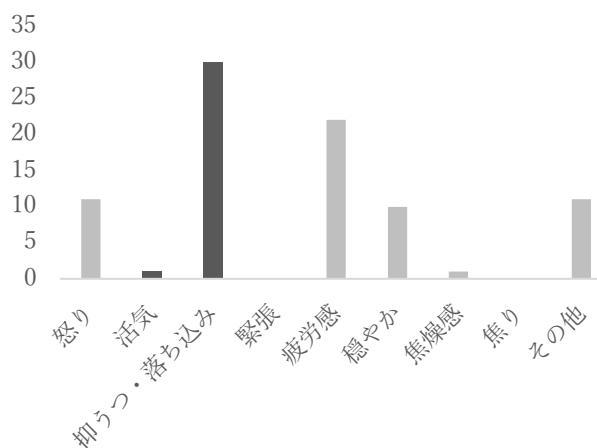


図2 雨天時に起こる感情

晴天時の行動について「買い物に行く」と答えたのは11人、「体を動かす」と答えたのは5人、「日が当たらない涼しい場所に出かける」と答えたのは23人、「海やプールに行く」と答えたのは3人、「花火をする」と答えたのは5人、「その他」と答えたのは2人であった。（図3）。

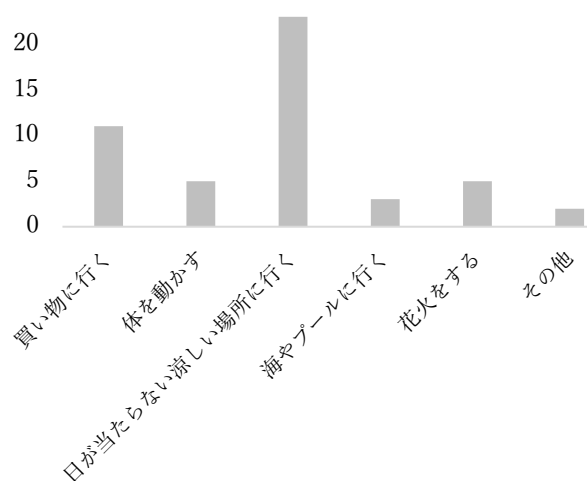


図3 外出時の活動

雨天時の行動について「映画を観る」と答えたのは12人、「本を読む」と答えたのは2人、「冷たいものを食べる」と答えたのは16人、「ゲームをする」と答えたのは14人、「友達と話す」と答えたのは2人、「その他」と答えたのは3人であった。(図4)。

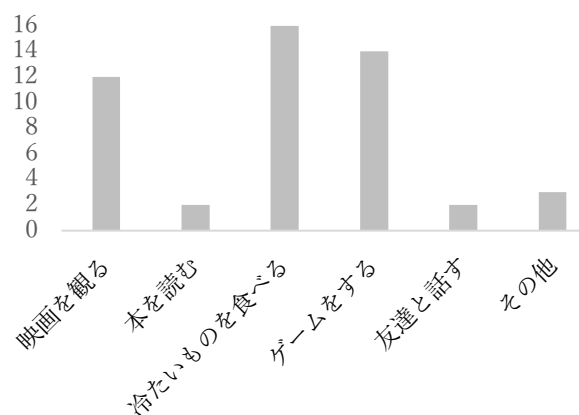


図4 室内での活動

考察

今回の調査では夏の暑さが自身の感情と行動にどのような変化をもたらすかを検討することを目的とした。その結果、暑い日における晴天時と雨天時に起こる感情において変化がみられた。晴天時は「活気」が高く「抑うつ・落ち込み」が低い一方、雨天時は「活気」が低く「抑うつ・落ち込み」が高いことが分かった。この感情の変化は、雨天時は晴天時と比較して湿度が高く太陽光が雲で遮られることで照度が低いことによって引き起こされたと考えられる。また、晴天時の外出行動においては、アクティブに活動するよりも自身が快適に過ごせるような場所を選んで活動することが分かった。

今回の調査では時期を夏に限定し、天候の違いによってみられる感情と行動の変化について検討した。しかし行動の変化についての質問は天候の違いではなく室内か屋外かの違いで作成してしまった。また、そこでの回答選択肢も室内と屋外で異なっていたため比較しづらかった。

参考文献

- 泉水清志 (2013). 刺激によって喚起される具体的な気分 感情心理学研究 20 Supplement 号, 32.
 福岡義隆 (2003). 気象・季節の感情障害への影響 地球環境 8 (2), 221-228.

推しの有無によるポジティブさの差異に関する調査

20C134 鬼丸 怜、20C184 直井柚菜
20C187 中島悠里、20C189 長山陽菜

問題と目的

本調査では、推しの有無によるポジティブさの差異について調査した。近年推し活、ヲタ活をする人が多い中でアイドルの推し、アニメの推しなど様々な分野の推しを推すことや推しの存在がいることでポジティブ思考になるのかと考え調査を行った。

推しがいる人は推しのグッズ、ライブ、共有を通じて日々幸せ、癒し、モチベーションを得て充実しているように見えるが実際に推しがいる人のすべてが物事をポジティブ思考に捉えることが出来ているのか、また、推しがいない人との差異にも着目し調査を進めた。なおここで扱う推しの定義は、他の人に薦めたいくらい自分自身が気に入っていて応援している人物やものを指す。

方法

調査期間

2022年10月13日から10月27日。

調査対象者

社会調査実習履修者68名（男28名、女40名）に調査票を配布した。

調査手続き

Microsoft Formsを用いて、調査票を配布、回答を得た。

調査内容

調査対象者の男女比を求めるために、質問項目1では性別を訪ねた。性別選択項目は男女の2つと設定した。質問項目2では回答者にジャンルを問わず推しがいるのかいないのかを「はい」「いいえ」の2項目で尋ねた。質問項目3では、回答者に最も推している推し1名についてのジャンルについて尋ね、選択項目は「アイドル」「女優・俳優(2.5次元も含む)」「(2.5次元とは漫画、ゲーム、アニメなどの2次元の世界を3次元の俳優がミュージカルや舞台などで忠実に再現したもの)」「声優」「YouTuber」「アーティスト」「スポーツ選手」「アニメのキャラクター」「漫画のキャラクター」「マスコットキャラクター」「ボーカロイド」(ヤマハが開発した音声合成技術、及びその応用製品の総称である)「VTuber」(2Dまたは3Dのアバターを使って活動しているYouTuberのこと)「歌手」(動画投稿サイトでボーカロイド曲やアニメソングなどのカバーし「歌ってみた」動

画を投稿している人たちの総称を指す)「インフルエンサー」(SNSなど、インターネットでの情報発信によって、ユーザーに大きな影響を与える人物を指す)「その他」の計14の選択肢を設けた。質問項目4では、回答者自身に当てはまる性格傾向について尋ね、選択項目は「好奇心旺盛である」「嫌な出来事に対してすぐに立ち直ることができる」「物事を深刻に考える(逆転項目)」「腹を立てることが多い(逆転項目)」「物事を肯定的に考える」「自分に自信がある」「新しいことに積極的に取り組む」「将来に希望を持っている」「情緒が安定している」「外交的である」計10の質問項目を「とてもそうだ」「ややそうだ」「少し違う」「全然違う」の4件法で尋ねた。質問項目5では、推しを通じて得たもの「楽しみ」「活力」「幸せ」「癒し」「ストレス解消」「モチベーション」「ときめき」「高揚感」「人生の豊かさ」「うるおい」「感動」「健康」「その他」の計13のポジティブ内容の選択肢を最大3つ選択し回答が出来るように設定した。

結果

有効回答数は47名(男17名、女30名)であり、そのうち推しがいる人は36名(76.6%)、推しがいない人は11名(23.4%)だった。

推しがいると回答してくれた学生が最も推しているジャンルの調査ではアーティスト6名、アイドル16名、歌い手4名、YouTuber・スポーツ選手・漫画、マスコットキャラクター・女優が各1名計5名、ゲームのキャラクター3名、その他2名となった。推しがいると回答した人の61%をアーティスト・アイドルが占めていた。

アニメ等のキャラクターよりも実在する人物を推している人が多かった。



Figure 1 推しの有無

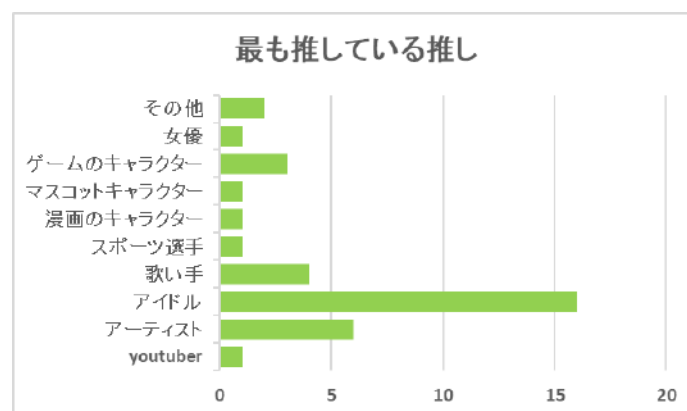


Figure 2 最も推している推し

自分の性格に関する 10 個の質問項目を設けた結果、情緒が安定している、将来に希望を持っている、好奇心旺盛である、の 3 つの項目に肯定的な回答が多かった。

外向的である、新しいことに積極的に取り組む、自分に自信がある、物事を肯定的に考える、腹を立てることが多い、物事を深刻に考える、嫌な出来事に対してすぐに立ち直ることが出来る、の 7 つの項目は否定的な回答が多かった。推しがいる人は外的な物事に対してはプラスに考えることが多いと考えられるが、自分自身に関連する思考傾向ではマイナスに考えていることが結果から読み取れる

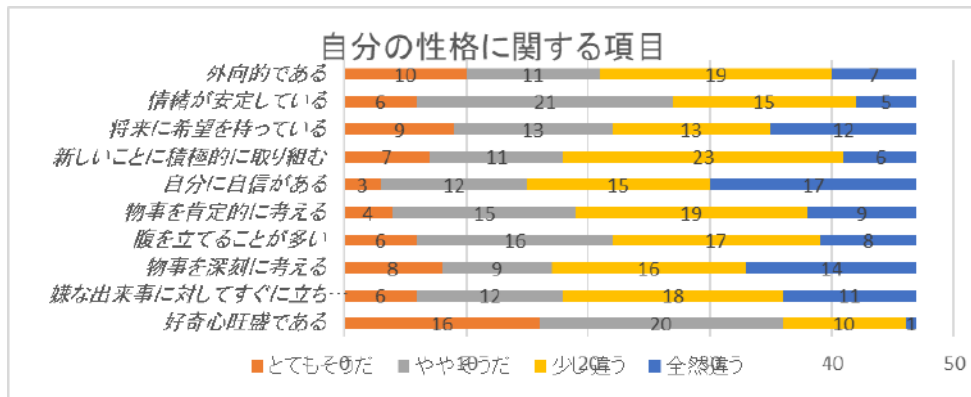


Figure 3 自分の性格に関する項目

推しを通じて得たもの上位 3 つについて回答してもらった結果は、「癒し、幸せ、楽しみ」の項目が上位であった。

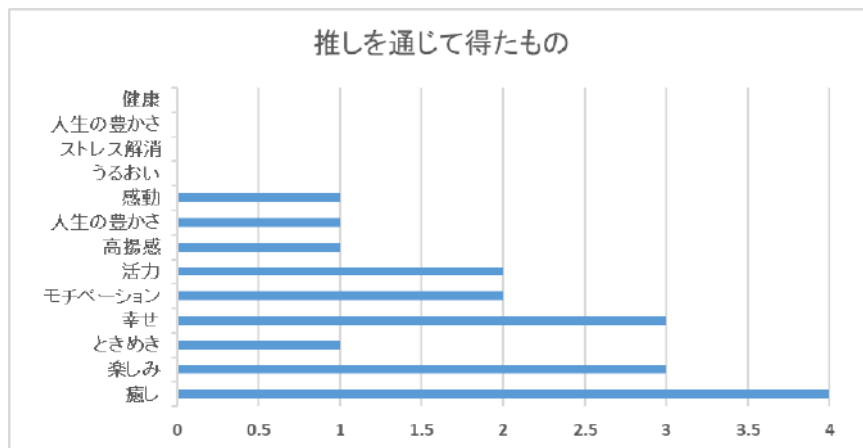


Figure 4 推しを通じて得たもの

考察

本調査では、推しがいることや推しの存在がいることでポジティブ思考になるのかと考える調査を行った。推しがいることで幸せや、癒しを得ることが出来るが推し活をするには金銭がかかってくるため、推しがいることで自身の心は癒されるが金銭面ではなかなか

癒しを得ることは難しい。推しがいる人は推しがいることによって幸せ、癒し、楽しみを得ているが自身に対しては自信が持てていないことがわかった。自分が直接関連しない物事に対しては肯定的に捉えることができるが、自分が直接関連する自分自身には自信が持てずマイナス傾向になると考えられる。また、「幸せ、癒し、楽しみ」の3つの項目が推しから得られるものとわかった。推しを通じて自身の心、感情に余裕をもたらすような存在と考えられる。

今後の展望としては、今回は推しの有無に着眼点を当てていたが調査を見返すと推しがいる人のみを対象となってしまったため、推しがいない人にも質問し比較することが望ましい。

引用文献

【推しとは】意味・語源・用語から関連作品まで徹底解説します！

<https://www.mottainaihonpo.com/kaitori/contents/cat07/080-oshitoha.html>

CANVAS.推しがいる人の9割が「人生が豊かに」、落ち込んだ時も「推しが力」6割超

<https://mynavi-agent.jp/dainishinsotsu/canvas/2022/06/post-727.html> (参照 2023-01-23).

マイナビウーマン.推しとは?「好き」「ファン」との違い、推し活についても解説

<https://woman.mynavi.jp/article/210630-4/2/#anchor-2> (参照 2023-01-23).

若者における「推し」の意義と心理的効果、森山咲希・吉岡聖美 (明星大学).

https://www.meisei-u.ac.jp/2022/s3lks40000007odc-att/220530_kanseikougakukai2022moriyama_web.pdf

大学生のマスク事情に関する調査

20C124 大川 慶人、20C157 齋藤 嵩大
20C176 武内 晟介、20C222 山田 萌

問題と目的

現在大学生はコロナウイルスの環境下で生活している。しかしこの状況下での生活に慣れてきたことや、ニュースなどの影響から、人と話さない、会わない場面であればマスクをつけなくても良いとされている。また最近ではマスクにファッション性を求めるなど、コロナウイルスの予防という面だけでなくほかの有用性を求める傾向があるように感じる。しかしそれを是としない人も多く、マスク警察といった人がマスクをつけていない人に対してまくしたてたりするといったことが問題視されている。「COVID-19 流行禍における大学生のマスク着用動機の検討」では、マスクをつける動機として感染予防対策と他者への同調があるとされていた。

本研究では以上のことを踏まえたうえでほかにもマスク着用動機があるのか、またマスクについて今の大学生がどのような認識であるのかを調査することを目的とする。

方法

調査対象者

社会調査実習履修者 68 名（男 28 名、女 40 名）に調査票を配布した。そのうち 53 名（男性：18 名 女性:35 名）から回答を得た。

調査時期

10 月 12 日～11 月 3 日。

調査手続き

社会調査実習の授業時間にマイクロソフトフォームズを活用して調査を行った。

調査内容

初めに日常生活においてマスクをつけますか、周りが付けているから付けているのような義務感はありますか、状況に合わせてマスクを着け外しますかといったマスクをつけるにあたっての基本情報をはい、いいえの二択で回答を求めた。次に周りに人がいるのか、それともいないのかなど状況によって変わるのかを調査するため、外す 4、外したくないとは思いますが、外す 3、外したいとは思いますが、外さない 2、外さない 1 の四件法を作成した。質問内容は暑さを感じた時、風邪などによるくしゃみが出る時、メイクをしてないとき、肌の調子が悪い等により、肌に刺激を与えたくないとき、周りの人の多くがマスクを外し

ているときの6項目だった。またマスクに対する意識や考えを調べるために、マスクについてのニュースを自身で調べますか、マスク義務化が解除されてもマスクを着け続けますかという質問を作成し、はい、いいえの二択で回答を求めた。マスク義務化が解除されてもマスクを着け続けますかという質問に関してははいと答えた人にはなぜマスクを着け続けるのか、いいえを選んだ人はなぜマスクを外したいと思うのかを自由回答の形式で求めた。次にマスクにファッション性を求めますか、マスクにこだわりはありますか、というマスクの素材などに関する質問をはい、いいえの二択で回答を求めた。またマスクについてのこだわりを調査するため、こだわりのあるものを全て選んでくださいという質問を作成し、機能性、色、素材、形状、その他の5項目を複数回答で質問した。マスクにこだわりがありますかという質問でいいえを選択した人に理由を尋ねるため、いいえの方は何故こだわりがないのですかという自由回答形式の質問を作成した。

結果

日常生活においてマスクをつけますかという質問では、はいが51人、いいえが2人となり大多数がマスクを着けていることが示された。またマスクをつけるかどうかの基準についてという質問群に関して、周りに人がいる時にマスクを着けようとする人が顕著に多くなっていることが分かった(図1)。

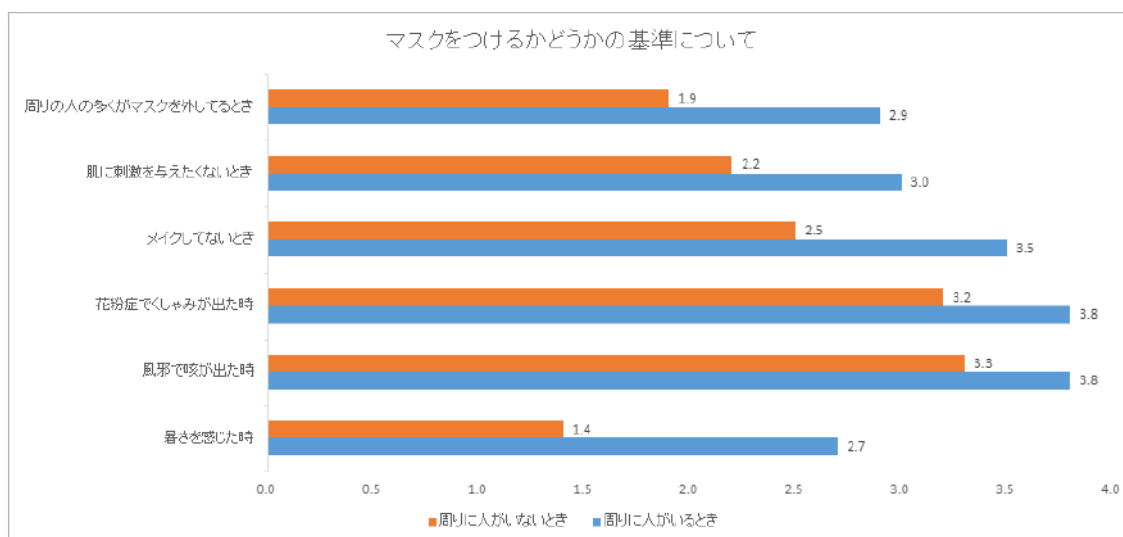


図1 マスクをつけるかどうかの基準

マスクのニュースを調べるのかというマスクについての興味を知るためマスクを普段つけている人に行った質問では調べる人が9人、調べない人が44人と調べない人が多いことが分かった。

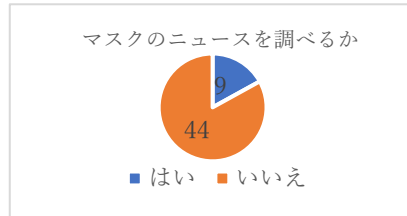


図2 マスク関連のニュースを調べるか

またマスクについてこだわりがあるかという質問でははいが31人、いいえが23人となり、こだわりがある人に内容を質問したが突出してこだわりが見られるものはなかった。

考察

今回は大学生のマスクの着用動機について調査を行った。マスクをつけるかどうかの基準について周りに人がいる場合と、いない場合を比較して質問した結果、周りに人がいる場合様々な状況においてマスクを外さないようにしていることが分かった。そこからマスクの着用動機の一つに先行研究同様、他者への同調があることが認められると考えた。またマスクのニュースなどを自分自身で調べている人が少ないことから感染対策についての意識は薄れているのではないかと考えた。

今回の調査と先行研究からマスクの着用動機に他者同調が大きく関わっていることが分かった。今後の展望としては他者同調のほかに、マスク着用動機があるのかを調べることが挙げられるだろう。

引用文献

吉澤・吉澤 (2022). COVID-19 流行禍における大学生のマスク着用動機の検討 容装心理学研究, 1(1), 20-28.

大学生における授業形態の違いによる実態調査

20C162 坂巻明日香、20C167 杉山福太郎

20C190 中山 実優、20C196 林 美有

問題と目的

2020年、日本で新型コロナウイルスが蔓延し始め、「コロナ禍」になってから約2年が経過した。イギリスのケント大学によると新型コロナウイルスが初めて発生したのは2019年10月初旬から11月中旬にかけてと推定しており、初の感染が確認されたのが同年12月に中国の武漢だとされ、翌年2020年1月には全世界へ広まった。日本でも2020年1月25日に感染者確認をされ次第に感染者が増加し、今でも感染の勢いは止まらない。それにより、職を失う者や学びの機会を奪われるなど年代問わず多方面で大きな影響を受けた。特に学生に注目すると、多くの学生が自宅でのオンライン授業*1を強いられた。その中でも、2020年度入学の現在大学3年生は国内でのコロナ蔓延のタイミングで入学したため、1年次からほぼ通学のない状況で大学生活が始まった。また、教員も試行錯誤で始まったオンライン授業は、授業の受講の仕方や課題が教員ごとに異なるなど学生に混乱を招いた。高原利幸、宮里心一(2020)ではデジタル環境になってしまったため、パソコンやネット環境を整備できない学生はスマートフォンで受講せざるを得なかったり、ネット上で教員に質問がしにくくなったとされており、学生の負担は急増したと考えられる。そして、2021年度からワクチン接種など感染対策が進んだことで対面授業*2が少しずつ再開され始めた。それに伴い、授業ごとにオンラインと対面を併用するハイブリッド授業*3を経て、2022年度はほとんどの授業が対面授業となった。この授業形態の変化に対して、岩本正姫・土肥崇史(2021)はこのような授業形態の変化にその都度対応をせざるを得ないことが、学生にとって心身のストレスになっていることを指摘している。

本調査では、オンライン授業と対面授業、その併用を経験した学生を対象に、授業形態の違いによる学習に対する意欲の変化やそれぞれの形態のメリットや改善点を調査し、学生はどの授業形態を選ぶのを好ましいと考えるかを検討することで、今後学生にとって最適な授業形態の活用法を考えることを目的とする。

*1 インターネットを介した遠隔授業のこと。リアルタイムで教師が配信する授業を視聴し受講する双方向型と録画された授業動画を好きな時間に何度も見返すことのできるオンデマンド型がある。

*2 学校に登校して授業を受講する形態のこと。最も一般的な学生の学習形態である。

*3 オンライン授業と対面授業を組み合わせた授業形態のこと。

方法

調査対象者

社会調査実習履修者 68 名（男性 28 名、女性 40 名）を対象とした。

調査対象者

2022 年 10 月 13 日～10 月 20 日。

調査手続き

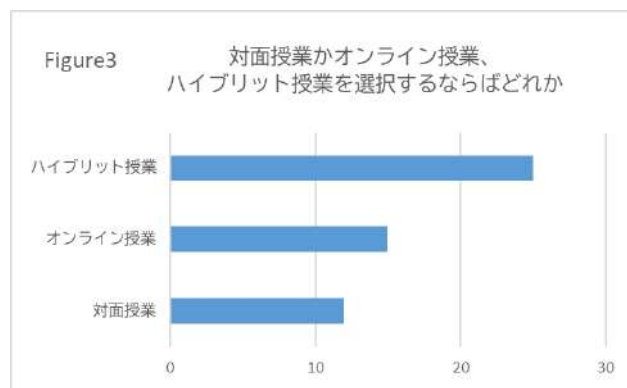
Microsoft Forms 上で調査票を作成・配布、その応答から Excel のファイル形式で回答を回収した。

調査内容

まず回答の男女比があるのかを調べるため、性別を尋ねた。回答は「男性」、「女性」、「その他」の選択式で求めた。次に回答者の生活環境が授業形態を選択することに影響するのかを調べるため、通学時間（片道）と、現在のアルバイトの有無または時間、居住形態を尋ねた。回答は片道の通学時間が「1 時間未満」、「1 時間から 2 時間」、「2 時間から 3 時間」、「3 時間以上」の選択肢で求めた。現在アルバイトをしているかは「はい」、「いいえ」の 2 択、「はい」と答えた人のみ「週に何時間働いているか」を記入形式で求めた。居住形態は「一人暮らし」、「実家暮らし」、「その他」の選択式で求めた。

続いて、授業形態の変化による学生の変化や各形態に対して考えたことを調べた。始めに授業形態の変化による学習意識の変化を調べるため、オンライン授業主体から対面授業主体に移行したことによる授業欠席回数の変化を尋ねた。回答は「増えた」、「減った」、「変わらない」の選択肢で求めた。次に、初めて経験したオンライン授業のメリットを尋ねた。回答は「対面授業の方がオンライン授業よりも集中して受け入れられる」、「対面授業の方がオンライン授業よりも大学生の実感がある（サークルや授業、友人関係、アルバイトなどの大学生のイメージ）」、「オンライン授業の方が対面授業よりも集中できる」「オンライン授業を経験したことで、word や Excel などの力が身についたと感じる」の項目を「そう思う・ややそう思う・あまりそう思わない・そう思わない」の 4 件法で求めた。また、両形態を経験した上で学生はどちらの授業形態を好むのかを調べるため、課題や受講の仕方という観点から尋ねた。課題面の回答は、「オンライン授業のときの課題（レポート）」と「対面時の課題（テスト）」を選択するならばどちらかを 2 択で求めた。同じように受講の仕方では「オンライン授業のときのカメラ ON」と「対面での顔合わせ」どちらを選択するか 2 択で求めた。加えて、両形態の改善点をそれぞれ選択肢の中からあてはまるもの 3 つ選択させ、尋ねた。オンライン授業の改善点として、「通信環境」、「15 回分の授業資料を紙媒体で配布」、「機材の配布（タブレットやノートパソコン）」、「グループワークの少なさ」、「授業の実施と課題提出方法の統一（Teams や Zoom など）」、「改善してほしいことがない」、「その他」から 3 つ選択式で求めた。対面授業での改善点は、「空調管

最後に、対面授業もオンライン授業または併用のハイブリッド授業を経験しどれを選択するのかの結果を Figure3 に表した。最も多かったのは、ハイブリッド授業で 25 名、次いでオンライン授業 15 名、対面授業の 12 名となった。48%と約半数の学生がオンライン授業と対面授業を併用するハイブリッドを選択した。



考察

本研究の目的は、オンライン授業と対面授業、その併用を経験した学生を対象に、授業形態の違いによる学習に対する意欲の変化、両形態のメリットや改善点を調査し、学生はどの授業形態を選ぶのかを検討することで、今後学生にとって最適な授業形態の活用法を考えることであった。調査の結果から、学生が最も多く選択した授業形態は対面授業とオンライン授業を併用するハイブリッド授業であった。

また、このような結果になった要因として、居住形態とオンライン授業時のカメラ ON よりも対面時の顔合わせを好む関係性と、課題の取り組みやすさがあると考えられる。まず、オンライン授業時のカメラ ON と対面時の顔合わせでは対面授業を好む結果となったのは、学生の居住形態として調査対象の 90%が実家暮らしであることが関連すると推察できる。一人暮らしならば、カメラ ON にする際に背景や騒音をあまり気にせずに済む。しかし、実家暮らしで自室がない場合はリビングなどで背景を気にしたり、家族に音を立てぬよう協力を仰ぐ必要がある。自室があったとしても、自宅にいる以上家族の生活音を出さないようにするのは不可能に近いと、少なくとも騒音は気にしなければならない。つまり、自宅にてオンライン授業でカメラ ON にできる環境を整えるならば、対面の顔合わせの方が学生の負担が少ないため対面を選んだと言える。

次に、課題については対面時のテストよりもオンライン時のレポートの方が取り組みやすいことが影響しているのではないかと推察する。対面時ではほとんどの授業がテスト形式の最終課題としているため、テスト当日の体調管理や電車の遅延などを考慮しておかねばならない。対して、オンライン時のレポート課題は体調や交通状況を考えることなく、提出日までに何度も変更が可能で最善の状態課題を提出することができる。また、これまでのオンライン授業で培った Word や Excel の力を活用するため、テストに向けた勉強よりもレポートを書く方が取り組みやすいと感じていると考えられる。

以上のことから、グループワークや実習などは対面授業で行うが、資料映像を見て学んだりレポート課題を課す場合はオンライン授業で行うなど、内容によって適切な授業形態を選択し併用するハイブリッド授業がこの時代の学生にとって最適な授業形態であると考えられる。

参考文献

岩本正姫、土肥崇史 (2021). 大学における授業形態別の心身ストレス反応の実態調査
札幌大学総合論議第 51 号

https://tokyoseitoku.sharepoint.com/:b:/s/msteams_fefcf9/EZudqpO1Jm9KiX3BJWF8DowBNyjeeFKXZGXXgNzTtxrzkw

すらら オンライン授業とは？メリットやデメリット・導入のポイントを解説

<https://surala.jp/school/future/list/1823/>

高原利幸、宮里心一 (2020). オンライン講義と対面講義における学生の意識比較 KIT
Progress No29 [http://kitir.kanazawa-](http://kitir.kanazawa-it.ac.jp/infolib/cont/01/G0000002repository/000/000/000000257.pdf#search=%22%22)

[it.ac.jp/infolib/cont/01/G0000002repository/000/000/000000257.pdf#search=%22%22](http://kitir.kanazawa-it.ac.jp/infolib/cont/01/G0000002repository/000/000/000000257.pdf#search=%22%22)

Niid 新型コロナワクチンについて (2021 年 8 月 5 日現在).

www.niid.go.jp/niid/ja/diseases/ka/corona-virus/2019-ncov/2484-idsc/10569-covid19-53.html

REUTERS 新型コロナ、19 年 10 月中国で既に発生の可能性 = 英大学調査

<https://jp.reuters.com/article/health-coronavirus-china-origins-idJPKCN2E105U>

大学生のマスクに対する意識調査

20C121 内田清佳、20C127 大関 和実
20C211 峯川哲太、20C212 宮井優里花

問題と目的

長引くコロナ禍により、マスクは私達にとって必要不可欠なものとなっている。感染拡大前まではマスクとは一般的に白い不織布のものであり、着用している人の方が少ないものであった。

しかし、コロナ禍においてマスクの着用は日常化し、マスクの色や模様が多様性が容認されるようになった（成・森川・長島・山南・松本、2022）。これによって白以外の多種多様なマスクを着用している人が増加し、近年、着色やデザインが施されたマスクは一種の装飾品として使用されることもある。「白色のマスクか黒色のマスクを着用している人が与える他者イメージ」の調査（伊藤・宮崎・河原、2019）において、黒色のマスクを着用していた人の方がネガティブな印象を持たれやすいことが明らかとなった。

また、マスクを着用すること自体の意識という点において、古家(2022)が行った調査では「他人からうつされたくない」と「他人にうつしたくない」ことの2つの理由からマスクを着用する人が多いことが明らかとなっている。

これらを踏まえ、本調査ではコロナの感染が多い時期に大学に入学した本学3年生の学生を対象に、選択するマスクの色や集団化したマスクを着用することへの意識、そしてマスクの着色及びデザインが与える他者イメージについて調査を行った。

方法

調査対象者

社会調査実習履修者 68 名（男 28 名，女 40 名）. に調査を依頼し，50 名（男 15 名、女 35 名）. の回答を得た。

調査時期

2022 年 10 月 20 日～11 月 10 日。

調査手続き

Microsoft Forms を用いて、調査票を作成し、回答を得た。

調査の内容

大学生がマスクを選択する際にどのような面に着目しているのか、マスクの色によって受ける印象に違いがあるのかなどといった、マスクへの意識度を尋ねた。

これらの項目を調査する上で、4件法やその他の項目に自由に記述してもらった方法を用いた。例えば、マスクの色による印象の受け方に関しては「良い印象である」～「悪い印象である」の4件法で回答を求め、マスクに求めるものや素材、実際に使用しているマスクの色などに関しては、回答が多くありそうな項目を予想し考え付いた3つほどの項目と、それ以外の回答に関しては「その他」の項目を設け、自由記述法で回答を求めた。

結果

今回の調査では、着用しているマスクの色の違いによって抱く他者イメージについて、白・黒・ベージュの3色に絞り、回答を求めた。それぞれの結果を Figure1 に示す。

まず白色のマスクでは「良い印象である」が63%、「どちらかというが良い印象である」が35%、「どちらかというが悪い印象である」が2%となり、ほとんど全ての学生が白色のマスクに対して良いイメージを抱いていることが明らかとなった。

一方、黒色のマスクでは「良い印象である」が23%、「どちらかというが良い印象

である」が35%と白色に比べかなり低い水準となり、「どちらかというが悪い印象である」が40%、「悪い印象である」が2%で、白色のマスクに比べて黒色のマスクはネガティブな印象を持たれる傾向にあることが明らかとなった。

そしてベージュのマスクでは「良い印象である」が49%、「どちらかというが良い印象である」が47%、「どちらかというが悪い印象である」と「悪い印象である」が共に2%ずつで、ベージュのマスクは白色のマスクと同様に良いイメージを持たれる傾向にあることが明らかとなった。

つぎに、今回の調査対象者である学生がコロナ禍での入学を経験しているため、初めて顔を合わせた仲間とはマスク越しの対面で、相手の表情を完全に捉えることが難しい経験をしているという点から「相手がマスクを外した時に、顔に

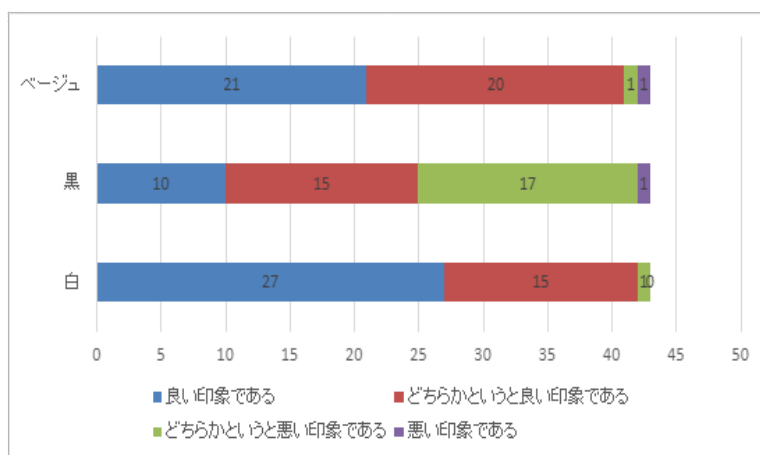


Figure 1. 着用するマスクの色とそれに伴うイメージ

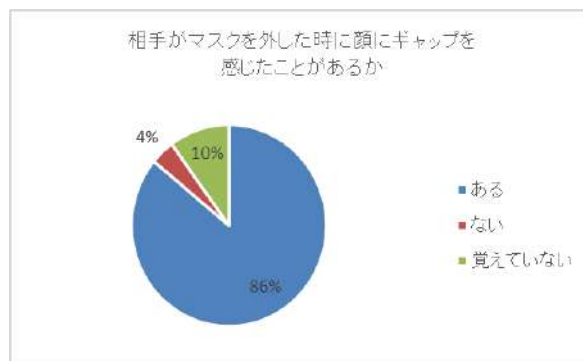


Figure 2. 相手がマスクを外した時にギャップを感じたことがあるか

ギャップを感じたことがあるか」という質問において 86%が「ある」と回答した (Figure2)。

また「ギャップを感じた経験がある」と回答した人への質問「その中でも最も印象が強かったギャップは、良い印象であったか」に、「印象が良かった」が 21%、「印象があまり良くなかった」が 65%、「印象が悪かった」が 14%という結果になった。マスクを外した際の顔のギャップを感じたことはほとんどの人が経験しており、それはあまり良い印象ではない傾向にあることが明らかとなった (Figure3)。

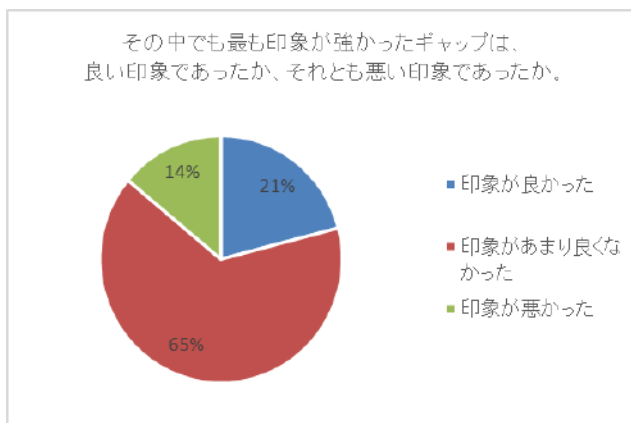


Figure 3. そのギャップは良い印象であったか、悪い印象であったか

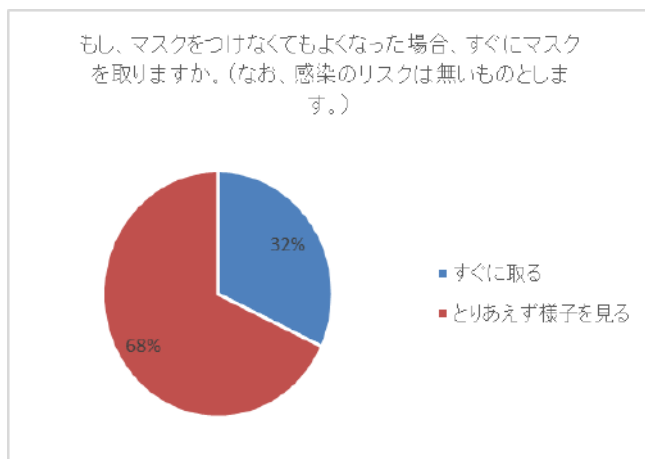


Figure 4. マスクをつけなくてもよくなった場合、すぐにマスクを取るか

他に、マスク着用における意識を問う項目として「もし、感染リスクのない状況でマスクをつけなくても良いとなった場合、すぐにマスクを外すか」という質問を設けた (Figure4)。

その結果、「すぐに取る」が 32%、「とりにあえず様子を見る」が 68%となり、感染リスクの有無に限らず様子を見る人が多い傾向にあることが明らかとなった。

考察

本調査ではコロナ禍を経験した大学生を対象に、マスク着用における意識及び着用しているマスクの色やデザインが与える他者へのイメージについて検討するために、調査を実施した。その結果、他者イメージにおいては着用する色によって印象が大きく変化すること、マスクそのものが表情を隠してしまうためにその見えない部分を想像してしまい、実際にマスクを外した表情を見るとギャップを感じてしまうことが多いということが明らかとなった。また「もし新型コロナウイルスが収束した場合、マスクの着用を直ちにやめるか」といった個人と集団との意識が関係する調査においては、多くが周囲の様子を

見ながら判断する傾向にあるということが明らかとなった。

着衣色による自身と他者が抱くイメージに関する調査(知念・伊神・木岡、2004)では、着用するマスクの色やデザインによって相手への印象が異なると報告されている。この調査は被験者に2着の服を用意し、一方が彩度の高い色、もう一方が彩度の低い色となるようにした上でそれぞれを着用した際の自身と観察者である他者が抱く印象にどのような違いがあるのかを調査したものである。その結果、彩度の高い服における自己評価では「健康的な」「爽やかな」といった明るい印象を回答した割合が高く、他者評価においても自己評価と同様に「爽やかな」や「目立つ」といった肯定的な評価をされる傾向にあった。

一方、彩度の低い服を着用した際の自己評価では「落ち着いている」「目立たない」といった暗い印象を回答しており、他者評価においては「落ち着いている」や「目立たない」に加え「重々しい」「知性的だ」といった評価もされる傾向にあった。この点から、色が与える自己及び他者への印象には明確な違いがもたらされるということが分かった。このことは今回行った着用するマスクの色によって自己と他者が受ける印象には違いがあると考えられる。

また「相手がマスクを外した時にギャップを感じたことがあるか」「そのギャップは良い印象であったか、悪い印象であったか」という質問に対し、多くの人が悪い印象を抱く傾向にあるという結果を得た。鎌谷らが行った研究では若者と高齢者がそれぞれマスクを着用し、その遮蔽の効果によって認識される顔年齢や魅力度に違いが生じるかを調査したものである。その結果、高齢者はマスクを着用しても認識される顔年齢に変化はなく、魅力度においても高く知覚されることはなかった。一方、若者においてはマスクの着用によって顔年齢が若く知覚され、魅力度においても高い水準で知覚されることが明らかとされている。この研究結果から、本調査においても大学生を対象としている点から、マスク着用による遮蔽の効果によって本来よりも魅力度や好ましさが高く知覚されたことによって、マスクを外した際にギャップを感じてしまう傾向にあったのではないかと考える。

「マスクをつけなくてもよくなった場合、すぐにマスクを取るか」という質問に対して多くの人が「とりあえず様子を見る」と回答した。古家らが、大学生のマスク着用の行動原理を調査した際、「あなたは、外出時にマスクをすることをどう思っていますか」という項目に、半数ほどの学生が「そんなに抵抗はない」と回答する一方で、3分の1ほどの学生が「できれば外したい」と回答した。心の内では「外したい」と思っているも、今回の調査結果のようにいざ外しても良いとなった際には「とりあえず様子を見よう」とする。

この「様子を見る」という言葉を「周囲の動きを確認する」ということと「感染のリスクはないものとしてもやはり心配なので、本当に大丈夫であるかを慎重に判断する」ということとの2通りの意味合いで捉えることができるのではないかと考える。もし前者の意味合いで解釈したのであれば、それは周囲と自身の行動とを合わせようとする同調圧力が働いていると考えられる。一方、後者の意味合いで解釈したとしても、この意味合いで判断した人が多い場合それが伝染して誰かへの同調圧力になる可能性が考えられる。

このように2通りの解釈が出来てしまう可能性があったという点においては、得られた回答の本質を知る上で判断が付きにくいいため、本研究における課題点であったと考える。

以上の点から、学生におけるマスク着用において着用する色やマスクの遮蔽効果、そして着用義務に至るまで、心理的側面が判断に影響を及ぼしていることが明らかとなったと考察する。

参考文献

伊藤 資浩・宮崎 由樹・河原 純一郎 (2019). 『黒色の衛生マスクの着用が印象と魅力の知覚に及ぼす影響』北海道心理学研究 41(0), 37-37.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/hps/41/0/41_1/_article/-char/ja/

鎌谷 美希・宮崎 由樹・河原 純一郎 (2022). 『衛生マスクは若者顔の印象のみを向上させる』日本認知心理学会第20回大会発表論文集

https://www.jstage.jst.go.jp/article/cogpsy/2022/0/2022_9/_pdf/-char/ja/

知念 葉子・伊神 久美子・木岡 悦子 (2004). 『着衣色によるイメージ形成と着装感 脳波にみる快適因子との関わりから』日本家政学会誌

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jhej1987/55/11/55_11_845/_pdf/-char/ja/

成 里紗・森川 和則・長島 愛・山南 春奈・松本 聖子 (2022). 『着用するマスクの明度が顔の大きさ知覚に及ぼす影響』日本認知心理学会発表論文集 日本認知心理学会 日本認知心理学会第19回大会

https://www.jstage.jst.go.jp/article/cogpsy/2021/0/2021_86/_article/-char/ja/

古家 聡(2022). 『日本人のマスク着用率と個人主義・集団主義』武蔵野大学グローバルスタディーズ研究所

https://mu.repo.nii.ac.jp/index.php?action=repository_view_main_item_detail&item_id=1710&item_no=1&page_id=13&block_id=21

SNS での交友関係と性格の関連についての調査

20C131 奥岡杏里

20C168 鈴木千佳

20C217 安田 葵

問題と目的

今日、インターネットは大多数の人々にとって、もはや生活の一部になりつつある。ネット利用者が増加しているなかで、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（以下、SNS と表記する）が社会的なつながりを提供するコミュニケーションツールの 1 つとなっている。

そのような中で、若者の人間関係と急速に普及した SNS との関係性を考察する研究は数多く存在する。SNS のコンテンツに対する価値観が SNS における人間関係の構築や行動学習の際に及ぼす影響について分析した先行研究では、積極的な人ほど記事投稿をする行動の違いがあったことや、積極的な人同士が結ばれ、消極的な人はほとんど結ばれない傾向があったことが明らかにされている（石井・三浦・鳥海・菅原, 2020）。

また、大学生におけるインターネット上の自己のパーソナリティ特性の認識についての調査で、現実の自己、理想の自己、ネット上の自己の間に差があることが示された（小杉, 2020）。

そこで、本研究では、SNS での交友関係や人間関係の構築と、現実での交友関係と人間関係の構築の関連を検討する。さらに、SNS と現実の性格を内向性と外向性の観点から比較し考察することを目的とする。本研究における SNS の定義は LINE、Facebook、Twitter、Instagram に代表されるオンラインサービス機能が一定程度の役割を果たしていると考えられているサービス全般のこととする。

方法

調査対象者

社会調査演習履修者 68 名（男 28 名、女 40 名）に調査票を配布した。そのうち、54 名（男性 18 名、女性 36 名）から回答を得た。

調査時期

10 月 6 日から 10 月 20 日。

調査方法

Microsoft Forms を用いて、調査票を配布し、回答を得た。

調査内容

SNS での人間関係と、現実での人間関係について尋ねるため、質問の項目を「あなたと SNS だけで繋がりをもっている人達に対しての行動や心情に対する質問」と「あなたと現実において繋がりをもっている人達に対しての行動や心情に対する質問」の 2 つに分け、それぞれに質問項目を作成した。

SNS については「以下は、あなたと SNS だけで繋がりを持っている人達に対しての行動や心情についての質問です。」と尋ね、現実については「以下は、あなたと現実において繋がりを持っている人達に対しての行動や心情についての質問です。」と尋ねた。それぞれの質問について、「当てはまる」「やや当てはまる」「やや当てはまらない」「当てはまらない」の 4 件法から、考えにもっとも近いものを選んでもらった。性別を尋ねる 1 項目を合わせて合計 19 項目の質問を設定した。

結果

有効回答は 54 名、回答率は約 79%であった。

18 の質問を変数として相関行列を算出し、さらに因子分析を行った。最尤法で抽出した因子にプロマックス回転を適用した結果、5 因子に分けることができた (Table 1)。それぞれ、第 1 因子を現実外向性、第 2 因子を積極信頼性、第 3 因子を SNS 思考、第 4 因子を SNS 外向性、第 5 因子を共通協調性とした

Table 1 因子分析の結果

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	独自性
SNSのチャット欄をよく使う				0.952		0.27461
SNSで繋がっている人は多ければ多いほど良い				0.417		0.47688
現実での友人が少なくても、SNSでの友人関係があれば良い			0.991			0.00500
新しい環境に行くことに抵抗を感じない	0.674					0.46499
人と関わるのが好き	0.782					0.21725
1人で何かするよりも、何人かの人と協力してやる方が好き					0.775	0.13756
交友関係が広く社会的である	0.911					0.31269
自分の意見を積極的に言う方だ		0.983				0.00500
何事も上手くいかない時に知り合いを頼ることができる		0.481				0.64915
SNSは人と関わるためのツールだと思う					0.640	0.61534

因子分析の結果から因子間相関を算出した (Figure 1)。現実外向性は積極信頼性、SNS 外向性、共通信頼性と正の相関があった。積極信頼性は SNS 外向性、共通協調性と正の相関があった。さらに、SNS 外向性は共通協調性と正の相関があった。

現実外向性と、SNS 思考は負の相関があった。SNS 思考と、共通協調性は負の相関があった。

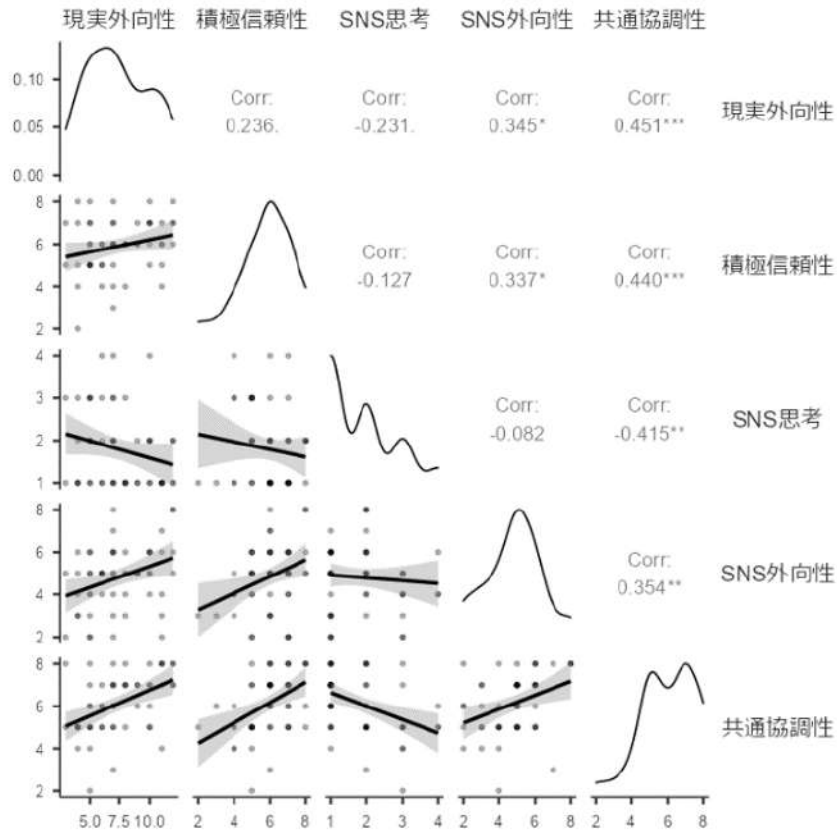


Figure 1 因子間相関の結果

考察

本研究の目的は、SNSでの交友関係や人間関係の構築と、現実での交友関係と人間関係の構築の関連を検討することと、SNSと現実の性格を内向性と外向性の観点から比較し考察することであった。

調査票調査の結果から因子分析、因子間分析を行った結果、現実での外向性はSNSでの外向性と正の相関があった。しかし、現実での外向性と、SNSのみの交友関係があれば良いとするSNS思考には負の相関がみられた。

先行研究では、積極的な人ほど記事投稿をする行動の違いがあったことや、積極的な人同士が結ばれ、消極的な人はほとんどと結ばれない傾向があったことが明らかにされている。本研究でも現実での外向性がSNSでの外向性に正の相関があったことをふまえると、現実で人と関わるのが好きであったり積極的に意見を述べる人は、SNSでも現実での外向性が有意に働き、積極的な行動を示す可能性が考えられる。さらに、現実の外向性と、SNS思考に負の相関があったことは、現実の人間関係において外向性が高い人は、友人関係の構築にも積極的であると考えられる為、SNSのみの交友関係があれば良いとするSNS思考とは負の相関がみられたのだと推察される。対して、SNSのみの友好関係があれば良いとする考えをもつ人は、現実での友人関係や人間関係に消極的、もしくは問題を抱えている可能性があるが、それは本研究では明らかにすることは出来なかった。

現実外向性が共通信頼性と正の相関があったことは、SNS を人と関わるためのツールであると認識していることと関連があると考えられる。その中でも SNS のみの繋がりを重要視しているのではなく、現実の交友関係を維持継続させる目的も含まれると推察される。現実外向性のある人は交友関係には現実の友人の有無も重要視していると考えられるため、SNS のみで人間関係が成立しているわけではないと捉えられる。

SNS 思考が共通協調性と負の相関があったことは、人と関わるためのツールとしての側面を SNS に求めている、また、誰かと何かをするよりも個人作業の方が好きだと捉えることもできるため、内向性が高いと考えられる。

本研究の課題として、特定の大学の生徒に依拠しておりサンプルが 54 名と少ないことに留意する必要がある。今後は、性差を含むサンプルデータ数を考慮した上で、本研究の知見を改めて確認する必要があるだろう。また、SNS 思考と、内向性との間に因果関係があるのかどうかについて、SNS 思考が現実での友人関係や人間関係に消極的、もしくは問題を抱えている可能性についてなど、本研究では明らかにすることが出来なかった点についての検討を重ねていきたい。

引用文献

- 石井 景渡・三浦 雄太郎・鳥海 不二夫・菅原 俊治 (2020). コンテンツに対する価値感の差異を考慮した SNS における関係ネットワーク生成過程の分析 人工知能学会第 34 回全国大会論文集、4.
- 小杉 大輔 (2020). 大学生におけるインターネット上の自己のパーソナリティ特性の表出と自尊感情との関係 静岡文化芸術大学研究紀要、20、 129-132.

大学生の日常生活における「自己評価」を左右する要因について

20C166 新保 里美

20C218 安田 達

20C228 渡邊 真奈

問題と目的

近年、自己肯定感というワードが改めて注目を集め、これを高めようという動きが社会全体で高まっている。自己肯定感とは、個人が自分自身を評価した際にありのままの自分を受容した上で全体的自己像を肯定的なものとして捉える感覚（吉森, 2015）. を指す。これがブームとなった背景には、コミュニケーション能力のコアとなる感情管理やメンタルケアの自己責任化と社会的繋がり希薄化に伴う孤独・孤立の深刻化といった社会の変化があると考えられる。また、内閣府の調査によると、日本では自己を肯定的に捉えている者の割合が諸外国と比べ低く、特に 10 代後半から 20 代前半にかけて差が大きいことが明らかになっている。この自己肯定感の低さというのは自信の喪失につながり、挑戦心や主体性の低下などの問題も見られる。さらには、抑うつ状態となり対人関係も億劫になったり、他者に対して攻撃的になってしまったりと数々の悪影響を及ぼしかねない。

河越・岡田（2015）. では、大学生の自己肯定感に及ぼす影響要因として、「充実感」、「主張」、「意欲」、「個性」の因子がプラスの影響、「他人の評価」、「わずらわしさ」、「不安」といった因子がマイナスの影響要因であることが示唆された。また、学校生活における対人関係や両親との関係性、両親の円満さなども自己肯定感と深い関わりがあることがわかっている。

そこで、本研究では先行研究であまり調べられていない「金銭面」や「容姿」、「学業」に関する項目を新たに加え、大学生の日常生活においてどのような要因が自己評価や自己肯定感に関係しているのかを再度検討することを目的とする。

方法

調査対象者

東京成徳大学で社会調査実習を履修している 68 名（男 28 名、女 40 名）. に調査票を配布した。そのうち 50 名（男性 20 名、女性 29 名、その他 1 名）. から回答を得た。

調査期間

10 月 12 日から 11 月 7 日。

調査方法

Microsoft Forms のリンクを共有し、授業内あるいは個人が回答できる時間帯に回答を求める調査票調査を実施した。なお、回答は無記名式で統計的に処理され、協力の有無に

より不利益が生じることはないと教示した。

調査内容

「人間関係・金銭面・容姿・学業」の4尺度から成る全22項目を用いた。各尺度の重要度に関する項目は1「低い」～5「高い」、その他の項目は1「全く当てはまらない」～5「非常に当てはまる」の5件法で回答を求めた。

結果

本研究で行った調査の有効回答数は50名（男性20名、女性29名、その他1名）であった。

まず、大学生活における4尺度の重要度の平均値を算出した（Figure1）。

その結果、「金銭面」を重要と考える大学生の平均が4.32と最も高く、次に高い「容姿」との差は0.28であった。先行研究により自己肯定感との関連が示唆されている「人間関係」の大学生における重要度の平均は3.98と金銭面、容姿よりも低い結果となった。また、「学業」の重要度の平均は3.94と最も低い結果となったが、人間関係との差は0.04と大きく差があるわけではなかった。

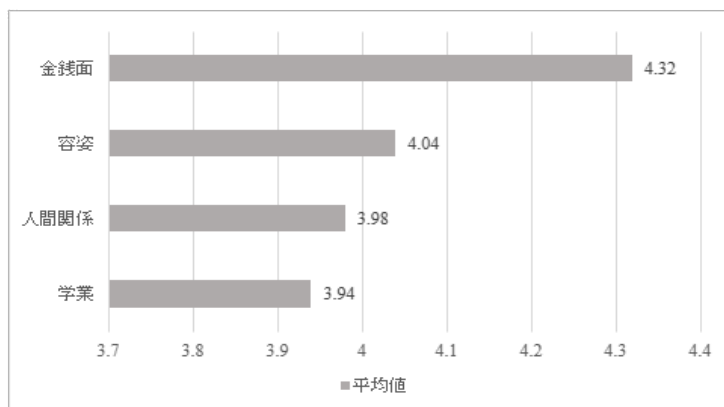


Figure 1 大学生活における重要度の平均値（n=50）。

「人間関係」に関する項目についての回答割合を Figure2 に示す。

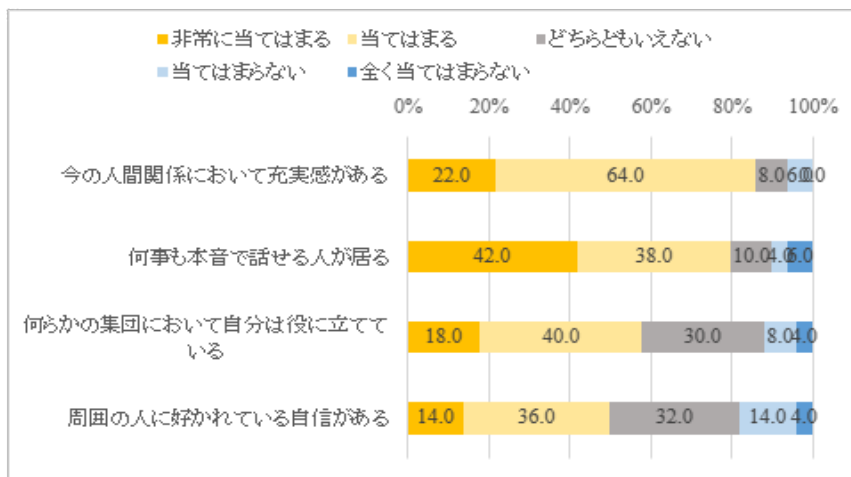


Figure 2 人間関係に関する各項目の回答割合（n=50）。

「今の人間関係において充実感がある」という質問に非常に当てはまるや当てはまると回答した人の割合は全体の 86.0% を占め、「何事も本音で話せる人が居る」という質問もポジティブ回答した人は 80.0% と高い割合を占めていた。

一方、「何らかの集団において自分は役に立てている」は 58.0%、「周囲の人に好かれている自信がある」では非常に当てはまるや当てはまると回答した人は全体の 50.0% とやや低い結果となった。

重要と考える大学生の割合が最も高かった「金銭面」に関する全項目のうち 2 項目の回答結果を Figure3 に示す。

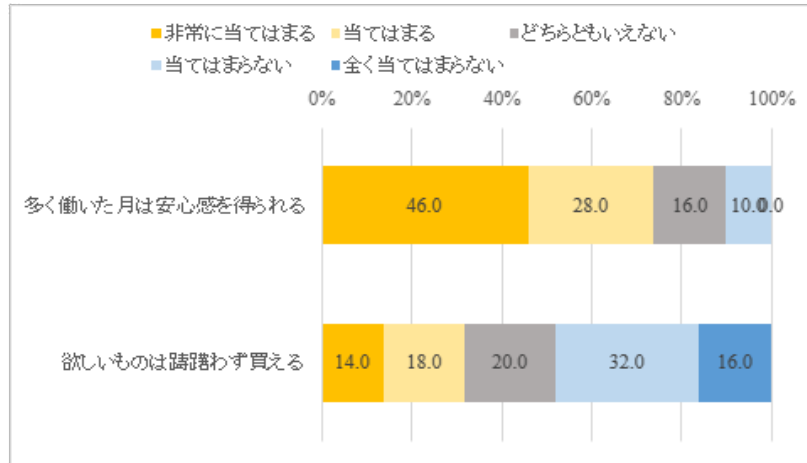


Figure 3 金銭面に関する各項目の回答割合 (n=50).

多く働いた月つまり多くお金が得られることで安心感を得ることができる人は 74.0% と大半を占めるものの、自分が欲しいものを躊躇わず買えるという質問では当てはまらないや非常に当てはまらないというネガティブ回答が 48.0% とポジティブ回答を上回った。

「容姿」に関する各項目の回答割合を Figure4 に示す。

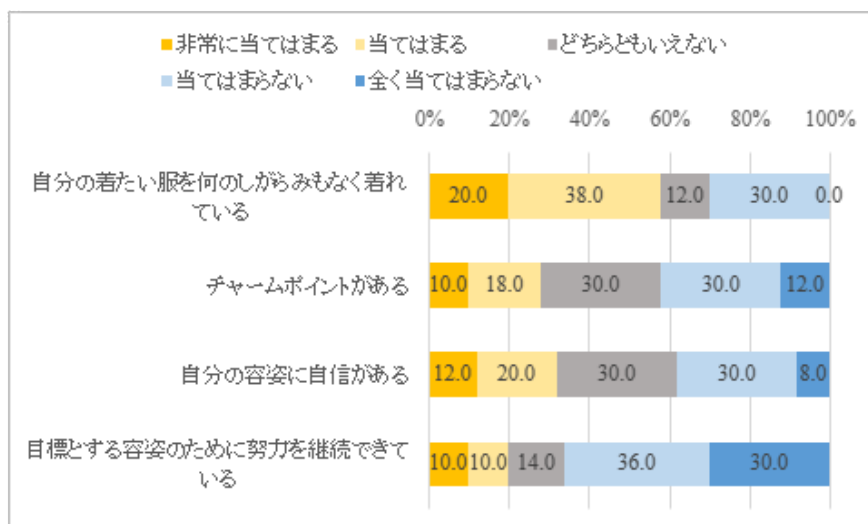


Figure 4 容姿に関する各項目の回答割合 (n=50).

他の尺度と比較しても、圧倒的にネガティブ回答の割合が高いことがわかった。「自分の着たい服を何のしがらみもなく着ている」という質問は 58.0%が非常に当てはまるや当てはまるの回答をしているものの、当てはまらないと回答した人が全体の 30.0%とやや高い結果となった。「チャームポイントがある」や「自分の容姿に自信がある」といった容姿への自己認識に関する質問は、ネガティブ回答の割合がポジティブ回答の割合を上回った。また、「目標とする容姿のために努力を継続できている」には、20.0%が非常に当てはまるや当てはまると回答し、66.0%が当てはまらないや全く当てはまらないと回答した。

4 尺度のうち最も重要度の平均値が低かった「学業」に関する全項目のうち 2 項目の回答結果を Figure5 に示す。

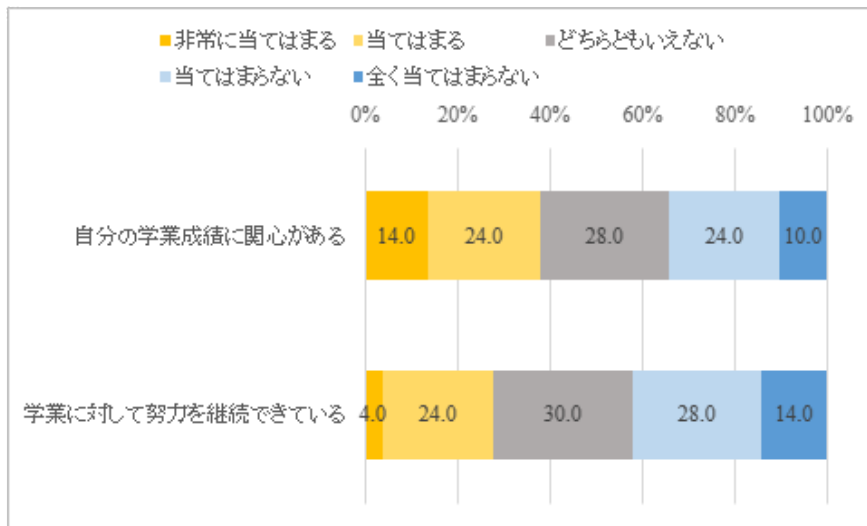


Figure 5 学業に関する各項目の回答割合 (n=50).

「自分の学業成績に関心がある」という質問では、全体の 38.0%が非常に当てはまるや当てはまると回答し、34.0%が当てはまらないや全く当てはまらないと回答した。また、「学業に対して努力を継続できている」の質問項目では、全体の 42.0%がネガティブ回答で 28.0%のポジティブ回答を大幅に上回った。

考察

本研究では、大学生の日常生活においてどのような要因が自己評価や自己肯定感に関連しているのかについて検討するため、調査票調査を実施した。その結果、先行研究から示唆されていた人間関係の他にも金銭面や容姿がそれらに影響を与えていることが示唆された。

Figure 1 で大学生活における重要度の平均値を求めたところ、金銭面や容姿が人間関係や学業を上回る結果となったことから、大学生の自分に対する満足度すなわち自己評価にはあまり研究されていないこれらの要因も多大な影響を与えていると考えられる。

Figure 2 の結果からは、充実感や本音で話せるといった相手に対する自身の気持ちはポジティブな回答が多いのに対し、自己効力感や好かれている感覚というのは前述したもの

に比べややネガティブ寄りの傾向がみられた。このことから、自己の充実感と自己肯定感や自己効力感は必ずしも比例するわけではないと考えられる。別の視点から考えれば、充実しているからこそ不安になるといった解釈や日本人特有の自身を過小評価する傾向がこの結果に表れたとも考えることができる。

Figure3 の結果からは、大学生は金銭面が重要と考える割合が最も高いものの、自分が欲しいものを躊躇わず買えるほどの金銭的余裕は無いことが示唆された。このことから、欲しいものを躊躇わず買える他者とそうでない自分を比較し自己肯定感を低下させかねないと推察することができる。

Figure4 の結果からは、容姿は金銭面と同様に重要と考えている人が多いが、自分の容姿をマイナスに捉えている人が多くいることから、理想の自分と現実の自分の狭間で悩むことが多いのではないかと考えられる。しかし、理想へと近づくための努力をしている人の割合が低かった。この結果からは、「どうせ理想の自分にはなれない」という自己肯定感の低さが自己肯定感を下げ続ける負のループを生み出しているのではないかと考えられる。また、自分の着たい服を着ることができていないと回答した人が全体の 30.0% いることから、現代においても個性が認められにくいことなどを背景に、自分らしさよりも他者の目が重要となってしまうことが考えられる。

Figure5 の結果からは、自己評価や自己肯定感と学業の関連が他と比較しあまり見られなかった。しかし、学業に関しては大学の偏差値や周囲の雰囲気によって大きく変化することが推察される。そのため、1 大学に限らず、さまざまな大学の学生を対象に調査することで有益な結果が得られるのではないだろうか。

最後に本研究の限界と展望を述べる。本研究は、調査対象者が 50 名と少なく十分な回答数が得られなかったことや東京成徳大学の学生に限定されていることから大学生全体の結果として考えるには不十分である。また、今回取り上げた 4 尺度が非常に幅広いことや自身で作成した項目であることから、各尺度の結果について深掘りすることができなかった。しかし、少ない金銭面や容姿と、自己評価や自己肯定感との関連が示唆されたことは意義のあるものだといえる。したがって今後は、ルッキズムの進む現代においての金銭面や容姿が自己肯定感に与える影響について他者比較の観点や、周囲の人との関わり方などを踏まえながら詳細な研究を行う必要がある。

参考文献

- 河越 麻佑・岡田 みゆき (2015). 大学生の自己肯定感に及ぼす影響要因 日本家政学会誌, 66 (5), 224-232.
- 内閣府 (2014). 平成 26 年版 子ども・若者白書 (全体版). 特集 1 自己認識 内閣府 Cabinet Office Retrieved January 23, 2023 from https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/tokushu_02.html
- 吉森 丹衣子 (2015). 大学生版自己肯定感尺度の作成ーカウンセリングの立場を重視してー 淑徳大学国際経営・文化研究紀要, 19 (1), 108.

大学入学後のリアリティショックに関する調査

20C118 上田侑那

20C155 齋藤鈴佳

20C170 隅井 樹

問題と目的

近年、大学生の問題として、休学や留年を引き起こす、大学生の学業離れ、大学不適應などの問題が起こっており、その要因の一つとして、学業に対するリアリティショックが挙げられている。

ベネッセ教育総合研究所(2007)の調査によると、大学生活に「イメージギャップがある」と答えた学生は約70%で、この10年間での増減はほとんど見られないことが分かっている。しかし、イメージギャップを感じた場面に着目すると、「キャンパスライフ不適應」や「授業に欲求不満」、「教官との交流が少ない」はいずれもイメージギャップが40%程度縮小して良い状態になっている一方、「学生支援不足」や「学習負荷過大」は比較的縮小の幅が小さいという特徴が見られた。

併せて、学習意欲低下の要因についても検討が行われている。尾崎・松島(2006)によると、授業意欲が下降した時期について1年生前期と回答した者が最も多く、その理由として、入学前に抱いていた授業への期待とのギャップが最も大きな要因として挙げられたことを明らかにしている。また、岩井(2017)は、大学1年生において、学業に対するリアリティショック状態については、入学前と入学直後の点数差が大きいほど大学生活の意欲が低くなり、入学前と現在(後期授業)の点数差が大きいほど授業の出席意欲、授業学びの意欲、大学生活の意欲すべてにおいて意欲の低い状態がみられたことを明らかにしている。

先行研究による調査結果から、学業に対するリアリティショックは、学業全般の意欲に影響を与えることが明らかになった。しかし、先行研究では、大学1年生を調査対象としているものが多く、現大学3年生における調査が行われていない。また、学業に対するリアリティショックにおける調査では、ネガティブなギャップについて問われているものが多く、ネガティブなギャップとポジティブなギャップの双方が大学生の学業適応にどのように関連しているのかという点については示唆されていない。

そこで本研究では、大学入学前に抱いていた大学における学業イメージと、入学後に経験している学業との間の、現在におけるズレによって生じた違和感をリアリティショックと定義し、実際に講義を受講して感じた良いギャップと悪いギャップの相互について尋ね、学業成績や進路選択、授業の出席率にどのような影響を及ぼすのかについての検討を行う。また、調査結果から、大学入学後のリアリティショックの緩和と適切な学生支援について考察を行うことを目的とする。

方法

調査対象者

社会調査演習履修者 68 名（男 28 名、女 40 名）に調査を依頼し、46 名（男 14 名、女 32 名）の回答を得た。回収率は 67.6%であった。

調査時期

2022 年 10 月 20 日から 2022 年 11 月 10 日の 21 日間。

調査方法

Microsoft Forms を用いて、調査票を配布し、回答を求めた。回答時間は 5～10 分の調査票調査で、途中で回答を中止したり、拒否をしても、不利益はないものとした。また、調査終了後、調査結果は統計的に処理した。

調査内容

リアリティショックの実態を調査するために、質問を(1)入学前の理想としていた大学像、(2)講義を受講して感じたギャップ、(3)各学年による出席率の変化と成績、(4)進路の変化の 4 つに分けて回答を求めた。各質問項目の内容は以下の通りであった。

(1). 入学前の理想としていた大学像

大学入学前に抱いていた大学像を明らかにするために、R 学科への入学理由と入試方法について回答を求めた。入学理由は複数回答で、「臨床心理に興味があった」・「資格が取りたかった」など計 10 項目用意し、当てはまるもの上位 2 つの回答を求めた。入試方法については、一般入試や AO 入試、指定校推薦・公募推薦・内部推薦などの計 7 項目を用意し、回答を求めた。

(2). 講義を受講して感じたギャップ

実際に講義を受講して感じたギャップを明らかにするために、問 3 では、講義を受講して感じた良いと思うギャップ、問 4 では、講義を受講して感じた悪いギャップについて回答を求めた。どちらも上位 3 つを選択する複数回答で、問 3 では「想像していた以上に専門性が高い」・「想像していた以上にグループワークが多い」などの計 15 項目を用意し、問 4 では「想像していた以上に授業に集中できないと感ずることがある」・「想像していた以上に授業時間が長い」などの計 15 項目を用意した。

(3). 各学年による出席率の変化と成績

1 学年から現在までの出席率の変化と成績（累計 GPA）を明らかにするために、3 学年前期までの各学年における出席率と累積 GPA についての回答を求めた。

出席率は、オンライン講義と対面講義の出席率を含めた「0～20%未満から 80～100%」の 5 件法を用いた。また、累積 GPA は、「1.0 未満から 3.0～4.0」と「答えたくない」

の6件法を用いて回答を求めた。

(4). 進路の変化

1学年から現在における進路の変化を明らかにするために、問9では、1学年の頃に希望していた進路について、「大学卒業後に大学院に進学し、心理職として、進みたい分野（教育・福祉・司法・産業・医療）が決まっていた」・「大学卒業後に大学院に進学し、心理職として、進みたい分野（教育・福祉・司法・産業・医療）が決まっていなかった」・「一般企業に就職を希望していた」など計9項目で回答を求めた。

問10では、1学年と現在を比較し、進路の変更が生じたのかについて「はい」と「いいえ」の2項目で回答を求めた。その後、問11では、問10で進路の変更が生じた回答をした調査協力者のみに回答を求めた。質問項目は、問9と同様である。

結果

(1)入学前の理想としていた大学像

本学科に入学した理由は、「臨床心理に興味があった」が92回答中40回答（43.5%）と最も多かった。また、「資格が取りたかった」が16回答（17.4%）、「合格した」が11回答（12%）であった（Figure 1）。

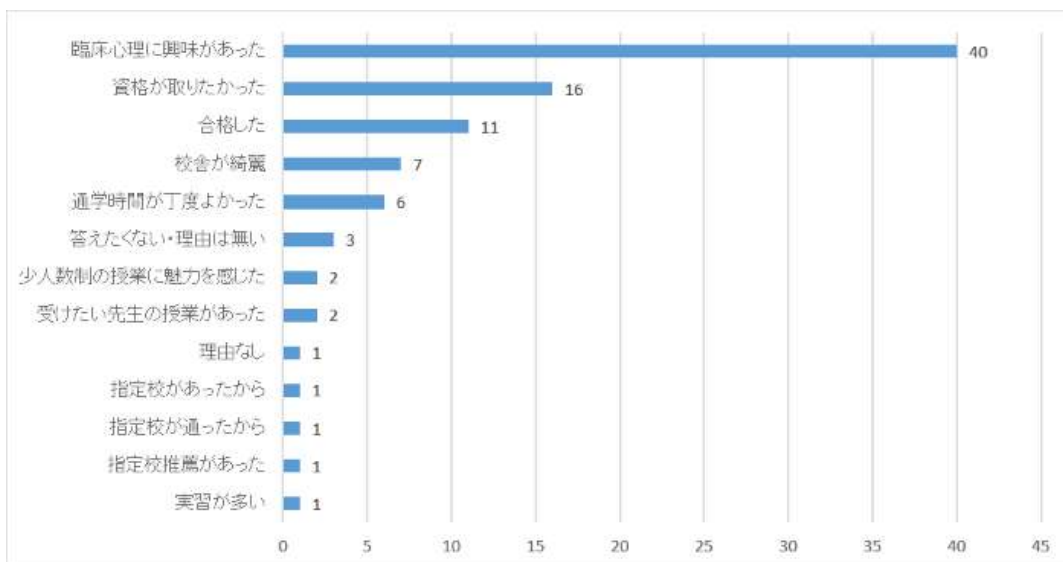


Figure 1 R 学科に入学した理由

一方、入試方法については、「指定校推薦・公募推薦・内部推薦」が46回答中25回答（54.3%）、「AO入試」が12回答（26.1%）、「一般入試」が9回答（20%）で、3つの方法以外の入試方法で入学した学生はいなかった（Figure 2）。

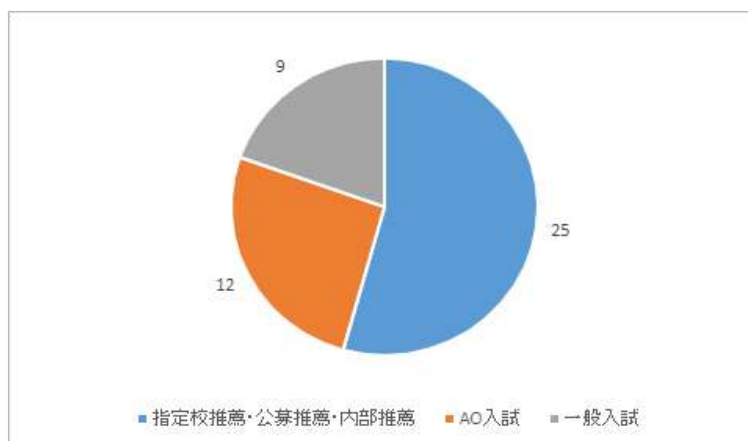


Figure 2 入試方法

(2) 講義を受講して感じたギャップ

実際に講義を受講して感じた良いギャップは、138 回答中「想像していた以上に専門性が高い」が 25 回答 (18.1%)、「想像していた以上にグループワークが多い」が 20 回答 (14.5%)であった。次に「想像していた以上に授業を通して、心理・心理支援に興味を持てた」が 7 回答 (12.3%)、「想像していた以上に授業内容が簡単」が 16 回答 (11.6%)、「想像していた以上に私用でのスマホ利用が可能である」が 13 回答 (9.4%)であった (Figure 3)。

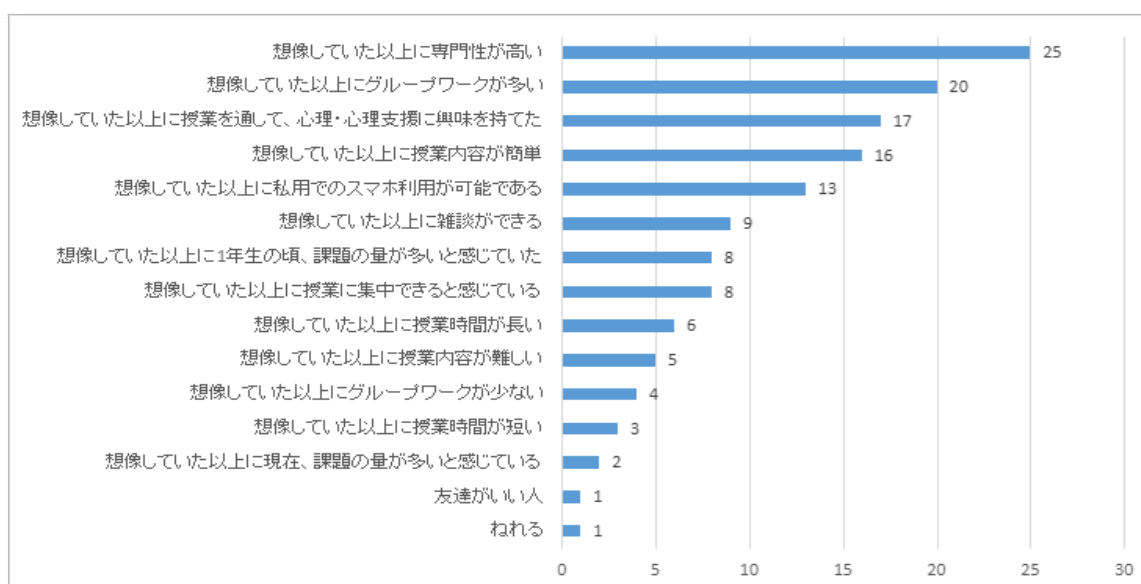


Figure 3 実際に講義を受講して感じた良いギャップ

一方で、実際に講義を受講して感じた悪いギャップは、「想像していた以上に授業に集中できないと感じることがある」の 25 回答 (18.1%)が最も多く、次に「想像していた以上に一年生の頃、過大課題の量が多いと感じていた」が 18 回答 (13%)、「想像していた以上に

に授業時間が長い」が 16 回答（11.6%）、「想像していた以上に授業内容が難しい」が 13 回答（9.4%）であった（Figure 4）。

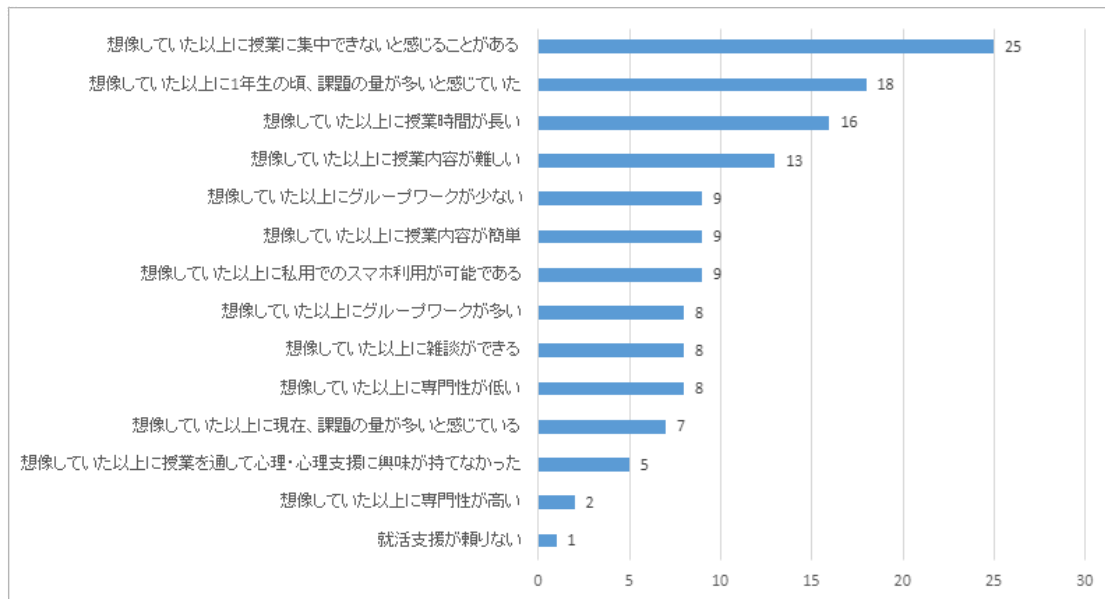


Figure 4 実際に講義を受講して感じた悪いギャップ

(3). 各学年における出席率の変化と成績

出席率の変化として、46 回答中「80～100%」は、1 年次が 33 回答（71.7%）、2 年次が 29 回答（63%）、3 年次が 27 回答（59%）と学年が上がるごとに減少傾向にあった。「60～80%未満」は、1 年次が 11 回答（24%）、2 年次が 13 回答（28.2%）、3 年次が 13 回答（28.2%）と学年が上がってもあまり変化は見られなかった。「40～60%未満」は、1 年次が 0 回答、2 年次が 3 回答（6.5%）、3 年次が 6 回答（13%）と学年が上がるごとに増加傾向がみられた。

3 学年前期までの累計 GPA は、46 回答中「3.0～4.0」が 17 回答（37%）と最も多く、次に多かったのは「2.0～3.0 未満」の 15 回答（32.6%）であった（Figure 5）。

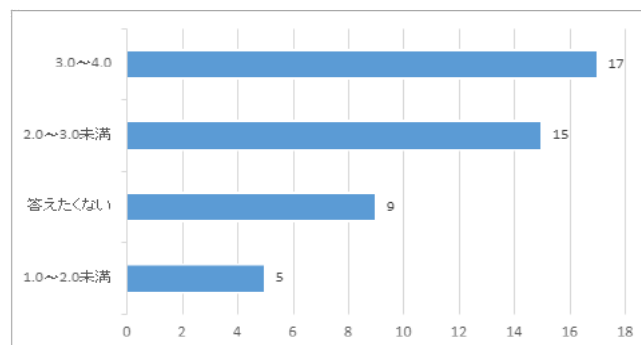


Figure 5 3 学年前期までの累計 GPA

(4). 進路の変化

1 学年の頃に希望していた進路は、46 回答中「大学卒業後に大学院に進学し、心理職と

して進みたい分野(教育・福祉・司法・産業・医療)が決まっていた」が 15 回答 (32.6%) と最も多く、「一般企業に就職を希望していた」が 13 回答 (28.3%)であった (Figure 6)。

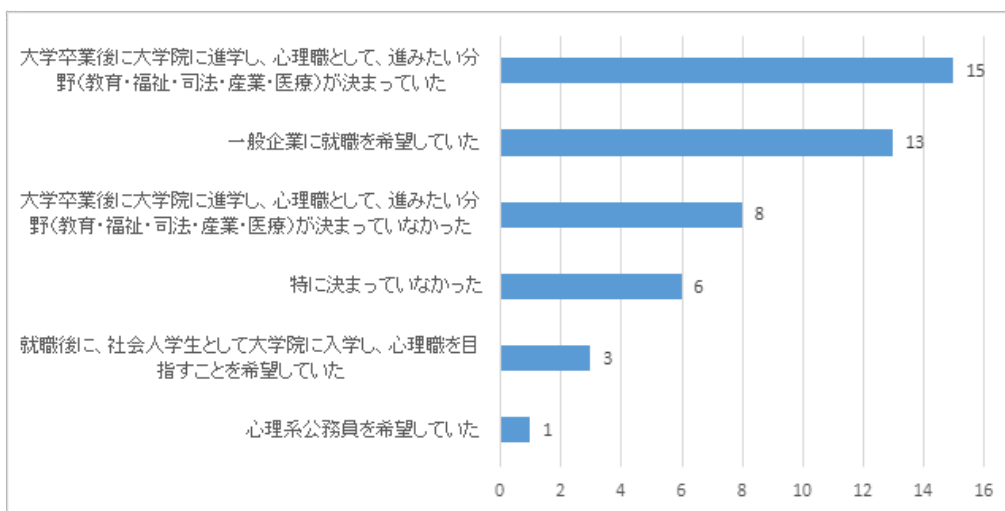


Figure 6 1 学年の頃に希望していた進路先

その後「進路の変更があった」と回答したのは 20 人で、全体の 43%であった。変更後の進路は「一般企業の就職を希望している」が 11 回答(58%)と最も多い結果であった (Figure 7)。

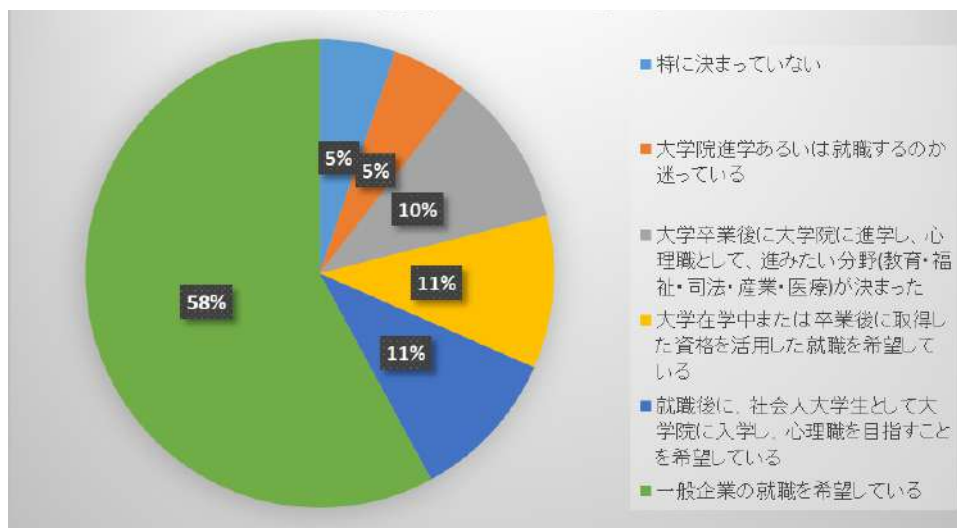


Figure 7 進路変更後に希望している進路先

考察

本研究では、入学前に抱いていた大学での学業イメージと、入学後に実際に経験した学業のズレにより生じたリアリティショックから、良いと感じたギャップ・悪いと感じたギャップの相互について尋ね、学業成績や進路選択、授業の出席率にどのような影響を及ぼ

すのかについて検討を行うため、質問紙調査を実施した。

その結果、入学前の理想としていた大学像では、本学科に入学した理由の上位3つとして、「臨床心理に興味があった」・「資格が取りたかった」・「合格した」が挙げられた。また、入試方法として、指定校推薦・公募推薦・内部推薦で合格した学生が25名と最も多く、次にAO入試、一般入試という結果であった。

1学年から3学年前期にかけての出席率の変化では、「出席率80～100%」は1学年が33回答(71.7%)、2学年が29回答(63%)、3学年前期が27回答(59%)と学年が上がるごとに減少傾向にあった。「出席率60～80%未満」は1学年が11回答(24%)、2学年が13回答(28.2%)、3学年前期が13回答(28.2%)と学年が上がってもあまり変化は見られなかった。「40～60%未満」は1学年が0回答、2学年が3回答(6.5%)、3学年前期が6回答(13%)と学年が上がるごとに増加傾向がみられた。

このことから、本学科に入学した学生は、入試方法の違いに限らず、学びの内容を重視して大学を選択していることが推測される。また、現代の大学生の傾向として、資格・技術につながる学部・学科・コース選びが指摘されている。大学名よりも学部・学科名で進学を決定する者が増加していることも指摘されており、学びの内容に対して否定的な違和感を強く感じた際に、学業や授業に対する意欲が低下するのは妥当な結果だと考えられる。また、講義への出席率と累計GPAについては、講義への出席率が「0～20%未満」または「20～40%未満」と回答した学生が、累計GPA「1.0～2.0未満」であることが多かった。しかし、「答えたくない」と回答した学生も一定数おり、講義への出席意欲にも個人差が生じていることが推測される。

実際に講義を受講して感じた良いギャップでは、「想像していた以上に専門性が高い」・「想像していた以上にグループワークが多い」・「想像していた以上に授業を通して、心理・心理支援に興味を持てた」・「想像していた以上に授業内容が簡単」・「想像していた以上に私用でのスマホ利用が可能である」に10回答以上の回答が集まった。このことから、「想像していた以上に専門性が高い」と感じた学生と「想像していた以上に授業内容が簡単である」と感じた学生に分かれていることはとても興味深く、入学前から心理・心理支援に興味を持ち、心理職を目指していた学生ほど「想像していた以上に専門性が高い」という項目を選択している傾向がある。また、本学科では、授業内でグループワークを行い、より身近に心理・心理支援を感じることが出来る講義内容であることから、専門科目に実際に取り組むことが出来るかどうかという点で良いギャップが生じたのではないかと考える。また、学年が上がるごとにつれて、心理演習や心理実習などの講義科目が取り入れられることにより、よりリアリティが増した講義内容になる。このことから、将来設計をするうえで、心理職を選択する厳しさを感じ、大学院進学から就職という形で進路変更を行う学生が多い傾向にあるのではないかと考える。

実際に講義を受講して感じた悪いギャップでは、「想像していた以上に授業に集中できないと感じることがある」と回答した学生が最も多く、次に「想像していた以上に一年生の頃、課題の量が多いと感じていた」・「想像していた以上に授業時間が長い」という結果であった。このことから、「想像していた以上に授業に集中できないと感じる」という結果

は、「想像していた以上に授業時間が長い」という結果に比例していると考え。高校の授業時間と大学の講義時間を比較すると、大学での講義時間は 40 分程長く、スマートフォンの使用も自由であることが要因の一つであると考え。また、「想像していた以上に 1 年生の頃、課題の量が多い」と感じる学生も多く、想像していた以上に自由な時間が取れないというリアリティショックが生じていることが推測される。

以上のことから、入学前に抱いていた大学での学業イメージと、入学後に実際に経験した学業のズレにより生じたリアリティショックが、学業成績や進路選択、授業の出席率に影響を及ぼすことが明らかになった。しかし、リアリティショックの中にも、良いギャップと悪いギャップの双方が存在し、講義への参加意欲の増減や大学卒業後の進路について、学生自身が向き合う場面や自分自身で選択できる機会が多くなったことが、今回の結果に反映されているのではないかと考える。しかし、現 3 学年は、新型コロナウイルスの感染拡大により、1 年次はオンライン講義、2 年次は、対面講義とオンライン講義を組み合わせたハイブリット型の講義形式であった。実際に対面講義へと移行した時期は 3 学年であり、そもそもが思い描いていたキャンパスライフではなかった場合が考えられる。しかし、今回の調査では、オンライン講義と対面講義の選択の有無については考慮しておらず、2 年次にオンライン講義を受講していた学生と対面講義を受講していた学生の各項目におけるリアリティショック場面については調査できていないことから、個人差に着目した項目を作成することが今後の課題となる。

最後に、大学入学後のリアリティショックの緩和と適切な学生支援については、各学年の担任と学生が定期的にコミュニケーションを取ることができる場を設けることや、学生同士が自由に交流ができるチャットグループへの参加などが挙げられる。また、大学入学前の事前指導に積極的に参加を促すことや、高校の授業時間や各大学のオープンキャンパスに参加した際に、実際に大学に通う現役の大学生への話を聞き、質疑応答ができる場を多く設けるなど、大学生活に対して、よりリアリティを感じることを提案していく必要性が現代の社会に求められていると考える。

引用文献

- 岩井貴美 (2017). 大学 1 年生の学業に対するリアリティショック状態における職業意識と学ぶ意欲の関連性 30, 2-11, 13-16
- 尾崎仁美・松島るみ (2006). 大学生の授業意欲の変化とその要因 プシキュー, 5, 63-74
- ベネッセ教育総合研究所(2007). 学生満足度と大学教育の問題点 第 4 章 学生満足度調査の概要

大学生の外見に関する意識調査

20C110 池田桃花

20C205 藤原由佳

20C221 山崎 萌

問題と目的

近年、男性でもメイクをしている人はそう珍しくなく、ネイルサロンや眉毛サロン、エステサロンなどにおいても、男性用メニューを用意しているサロンも少なくない。そんな中、ジェンダーレスコスメ、ジェンダーレススキンケアを開発するメーカーも出てきている。女性のみならず、男性の美意識も高まってきていると考えられる中、そもそも、メイクやスキンケアなど、外見に気を遣う理由は何か。大学生のうち、どのくらいの割合の人が自分の外見に気を遣っているのか調査することを目的とする。

方法

調査対象者

社会調査演習を受講している大学生 68 名（男 28 名、女 40 名）に調査票を配布した。そのうち、42 名（男性 13 名、女性 28 名、その他 1 名）から回答を得た。

調査期間

令和 4 年 10 月 27 日～11 月 10 日。

調査手続き

Microsoft Forms を用いて、調査票を配布、回答を回収した。

調査内容

外見に関する意識を調査するため、(1)外見への考え方(2)メイクやヘアセットへの考え方(3)外見へのお金の使い方の3つに分けて回答を求めた。

(1)では、「外見に関してコンプレックスがある」「自分の外見が周りの人にどう思われているか気になるときがある」「外見的な憧れの存在、目標とする存在がいる」など、外見への考え方について尋ねた。

(2)では、「家の近所でもメイク又はヘアセットをする」「メイクやヘアセットもしない状態でも、人のいる場所に行くことができる」左記の質問での該当者のみ、「その理由」など、メイクやヘアセットに関しての考え方について尋ねた。

(3)では、「毎月の出費のうち、外見に1番お金をかけている」という質問で、外見へ

のお金の使い方について尋ねた。

結果

本調査では、外見に関する意識を調査するため、(1)外見への考え方(2)メイクやヘアセットへの考え方(3)外見へのお金の使い方の3つに分けて回答を求めた。

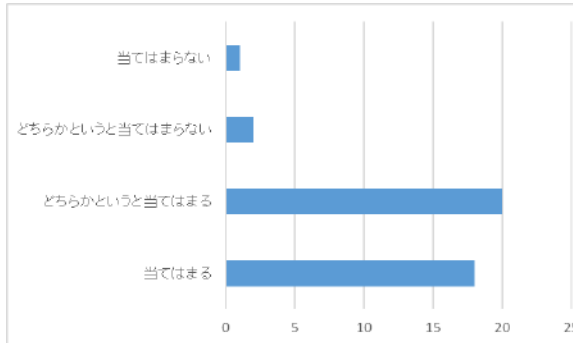


図1 外見に関してコンプレックスがある

「自分の外見が周りの人にどう思われているか気になる時がある」という項目に対し、当てはまる 19 回答、どちらかという当てはまる 19 回答、どちらかという当てはまらない 1 回答、当てはまらない 2 回答であった(図2)。

まず、「外見に関してコンプレックスがある」という項目に対し、当てはまる 18 回答、どちらかという当てはまる 20 回答、どちらかという当てはまらない 2 回答、当てはまらない 1 回答であった(図1)。

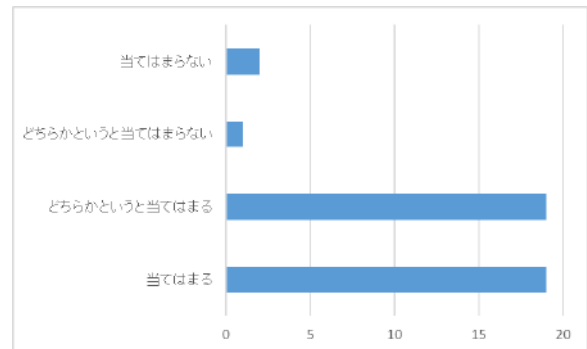


図2 自分の外見が周りの人にどう思われているか気になる時がある

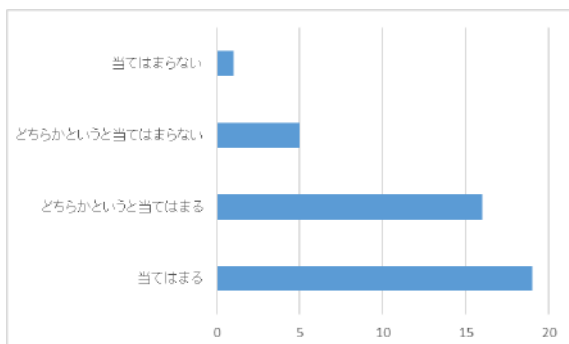


図3 美容に興味がある

「美容に興味がある」という項目に対し、当てはまる 19 回答、どちらかという当てはまる 16 回答、どちらかという当てはまらない 5 回答、当てはまらない 1 回答であった(図3)。

「自分は美意識が高い方だと思う」という項目に対し、当てはまる 3 回答、どちらかという当てはまる 10 回答、どちらかという当てはまらない 20 回答、当てはまらない 8 回答であった（図 4）。

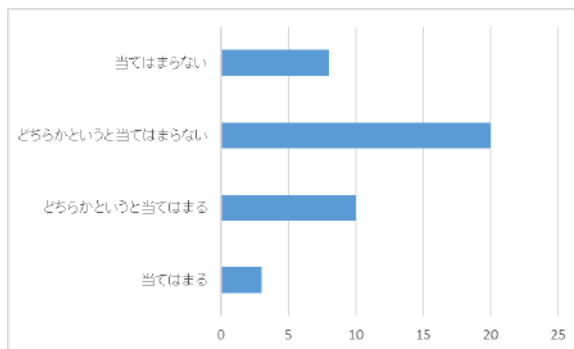


図4 自分は美意識が高い方だと思う

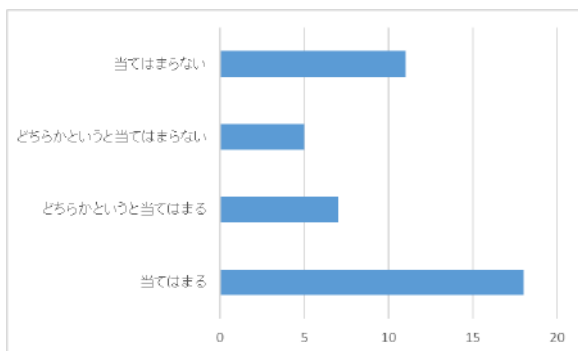


図5 外見的な憧れの存在、
目標とする存在がいる

「外見的な憧れの存在、目標とする存在がいる」という項目に対し、当てはまる 18 回答、どちらかという当てはまる 7 回答、どちらかという当てはまらない 5 回答、当てはまらない 11 回答であった（図 5）。

続いて、「日常生活の中で、メイク又はヘアセットをしますか」という項目に対し、はいと回答した 38 名に「メイクもヘアセットもしない状態でも人のいる場所に行くことができますか」という項目を設けた。その結果、はい 27 回答、いいえ 11 回答であった。

いいえと回答した 11 名にその理由を尋ねたところ、最も多かったのは「メイク又はヘアセットをしていない自分を見られたくないから」で 10 回答であり、続けて「コンプレックスを解消したいから」「自分の気分を上げたいから」で共に 7 回答であった（図 6）。

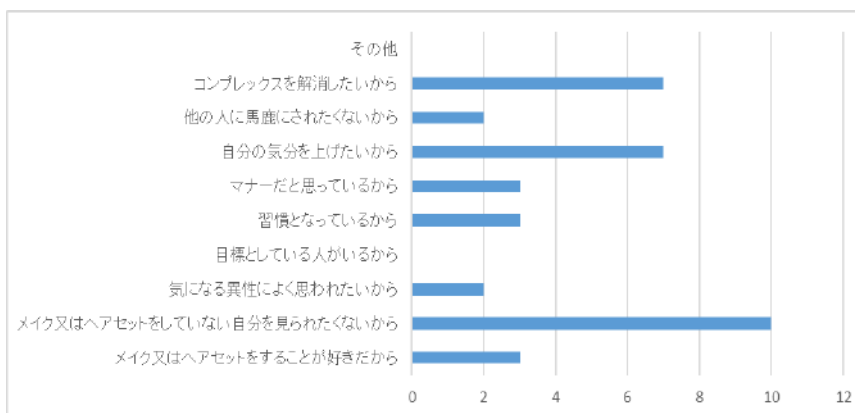


図6 メイクもヘアセットもしない状態で

最後に、「毎月の出費のうち、外見に 1 番お金をかけている」という項目に対し、はい 7 回答、いいえ 34 回答であった。

考察

本研究の目的は、メイクやスキンケアなど、外見に気を遣う理由は何か、大学生のうち、どのくらいの割合の人が自分の外見に気を遣っているのか調査することであった。

「外見的な憧れの存在、目標とする存在がいる」と「美容に興味がある」の関連を検討するため、相関係数を算出したところ、中程度 ($r = .667$)の相関が見られた。このことから、美容に興味を持ったきっかけや、興味を維持するためのモチベーションには、外見的な憧れの存在、目標とする存在が大きいことが考えられる。外見的な憧れの存在、目標とする存在に少しでも近づくために、さまざまな美容に関する情報を集め、いくつもの化粧品などを使用している様子は、美容に興味があると見て良いだろう。

また、「自分の外見が周りの人にどう見られているか気になるときがある」と「外見に関してコンプレックスがある」の関連を検討するため、相関係数を算出したところ、中程度 ($r = .531$)の相関が見られた。このことから、自分の外見の見られ方を悪いと感じている人ほど外見にコンプレックスがあり、コンプレックスが人から見えるところであればあるほど、周りの人にどう思われているか気にしやすい、ということが考えられる。さらに、メイクもヘアセットもしない状態で人のいる場所に行くことができない理由として最も多かった、「メイク又はヘアセットをしていない自分を見られたくないから」という項目もコンプレックスが関係していると考えられ、その証拠に「コンプレックスを解消したいから」という項目が次いで多く、【外見に関してコンプレックスがある→周りの人にどう思われているか気になる→コンプレックスを解消するためにメイク又はヘアセットをする→コンプレックスを解消できていない、メイク又はヘアセットをしていない自分を見られたくない】という循環が生まれているのではないかと考えられる。

さらに、「自分は美意識が高い方だと思う」と「美容に興味がある」の関連を検討するため、相関係数を算出したところ、中程度 ($r = .518$)の相関が見られた。このことから、美容に興味があり、さまざまな情報を集め、自分磨きをしている様子から、自分は美意識が高い方だと感じた人が多かったのではないかと考える。

しかし、「美容に興味がある」と中程度 ($r = .667$)の相関が見られた「外見的な憧れの存在、目標とする存在がいる」と「自分は美意識が高い方だと思う」の関連を検討するため、相関係数を算出したところ、($r = .366$)となり、ほとんど相関が見られなかった。このことから、外見的な憧れの存在、目標とする存在がいて、少しでも近づくために努力はしているものの、ではそれが美意識の高さとイコールの関係にあるかと尋ねられると、自信がなくなってしまうのではないかと考えられる。

それは自己肯定感にも影響することが考えられ、コンプレックスの有無や周りの人からの見られ方にも自己肯定感に影響を及ぼしていると考えられるため、外見と自己肯定感は深い関係があると考えられる。

参考文献

- 川名好裕 (2012). 笑顔および外見による魅力変化 立正大学心理学研究所紀要, 10, 31-47.
- 内藤美沙紀 (2008). 大学生における化粧行動と美しさ意識との関連
[https://seijo.repo.nii.ac.jp/index.php?action=repository_action_common_download
&item_id=3920&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1&page_id=13&block_id=17](https://seijo.repo.nii.ac.jp/index.php?action=repository_action_common_download&item_id=3920&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1&page_id=13&block_id=17)
- 平松隆円 (2005). 大学生の化粧行動の実態解明と社会スキル・性役割・自意識・他者意識との関連性 佛教大学教育学部学会紀要, 4, 165-179.

大学生の就活事情に関する調査

19C133 粕谷拓郎、20C188 中村響亮

問題と目的

近年では就職活動が原因で鬱傾向に陥ってしまう人が増えている。就活鬱とも呼ばれているこの問題では、身の回りの人は就職先が決まっていたり、やりたいことが明確であったりする中で、自身はそうではないと言った状況からくる焦りや、プレッシャーからくるものだと考えられる。そのため本研究では、就職活動に対する意欲や準備に着目し、就活の意欲や準備に関連する心理的変数がどのようなものであるかを明らかにすることを目的とする。

方法

調査対象者

社会調査実習履修者 68 名（男 28 名、女 40 名）に調査票を配布した。そのうち 45 名から回答を得た。

調査期間

2022 年 11 月 3 日～2023 年 1 月 12 日。

調査手続き

Microsoft Forms で調査票を作成し、web 調査を実施した。授業内で調査依頼を行い、調査協力に同意した者に、空き時間で回答するよう求めた。

調査内容

以下に示す調査項目について、いずれも、「4. そうである」、「3. どちらかというところである」、「2. どちらかというところではない」、「1. そうではない」の 4 件法で回答を求めた。

(1) 就職活動の準備状況（以下、就活準備）

「就職活動について関連することを調べている」など準備状態に関する 10 項目を設けた。得点が高いほど、準備状況が良好であることを示すように、「就職活動を漠然と進めている」「3 年の夏休みから就職活動を始めるのは早いと感じる」「就職することに対して実感が湧かない」の 3 項目は逆転項目として扱った。

(2) 就職活動に関する心理的変数

「就職活動をするつもりはない」「可能ならまだ学生でいたい」など、就活の背景にある心理的変数として 10 項目を設定した。

(3) 就職活動に対する意欲（以下、就活意欲）

就活に向けた具体的な行動・認知を把握し、意欲を測定する。「リクルートスーツをもっている」「エントリーシートの準備は整っている」など10項目。

結果

1. 各項目の得点分布について

(1) 就活準備に関する項目の得点分布

各項目得点の基礎統計量を Table1 に示した。「就職活動は3年生になる前に始めた」「就職したい企業が決まっている」「就職することに対して実感が湧かない」については、得点の分布が低い方に偏っていた。

Table1 就活準備に関する各項目の基礎統計量

変数名	有効N	平均値	中央値	標準偏差	分散	最小値	最大値
現在、就職活動をしている	45	2.60	3.00	1.07	1.15	1.00	4.00
就職活動について関連する事を調べている	45	2.67	3.00	1.07	1.14	1.00	4.00
就職活動を漠然と進めている（*）	45	2.36	2.00	1.09	1.19	1.00	4.00
3年の夏休みから就職活動を始めるのは早いと感じる（*）	45	2.76	3.00	0.91	0.83	1.00	4.00
就職活動は3年生になる前に始めた	45	1.36	1.00	0.80	0.64	1.00	4.00
就職について既にやりたいことが決まっている	45	2.07	2.00	1.07	1.15	1.00	4.00
就職したい企業が決まっている	45	1.80	1.00	0.99	0.98	1.00	4.00
民間企業への就職が第一志望である	45	2.49	3.00	1.18	1.39	1.00	4.00
大学で学んだことに関する職種を希望している	45	2.04	2.00	1.11	1.23	1.00	4.00
就職することに対して実感が湧かない（*）	45	1.62	1.00	0.81	0.65	1.00	4.00

*は、逆転項目として、得点化した。

(2) 就職活動に関連する心理的変数の得点分布

各項目得点の基礎統計量を Table2 に示した。「就職活動をするつもりはない」「就職活動をしている自分が好きである」「就職活動は楽しい」については、得点の分布が低い方に偏っていた。一方で、「就職活動に対しての不安が大きい」「可能ならばまだ学生でいたい」「就職活動は憂鬱だ」「就職活動に対してストレスを感じる」は、得点の分布が高い方に偏っていた。

Table2 就職活動に関する心理的変数の基礎統計量

変数名	有効N	平均値	中央値	標準偏差	分散	最小値	最大値
就職活動をするつもりはない	45	1.71	1.00	1.12	1.26	1.00	4.00
就職活動に関して好きや嫌いといった感情は湧かない	45	2.20	2.00	1.10	1.21	1.00	4.00
就職することに対して前向きである	45	2.16	2.00	0.93	0.86	1.00	4.00
就職活動をしている自分が好きである	45	1.73	2.00	0.86	0.75	1.00	4.00
就職活動に対しての不安が大きい	45	3.62	4.00	0.83	0.69	1.00	4.00
可能ならばまだ学生でいたい	45	3.69	4.00	0.79	0.63	1.00	4.00
就職活動は憂鬱だ	45	3.53	4.00	0.84	0.71	1.00	4.00
就職活動に対してストレスを感じる	45	3.62	4.00	0.78	0.60	1.00	4.00
友人の就職活動の進捗状況が気になる	45	2.96	3.00	1.09	1.18	1.00	4.00
就職活動は楽しい	45	1.58	1.00	0.72	0.52	1.00	4.00

(3) 就活意欲に関する各項目の基礎統計量

各項目得点の基礎統計量を Table3 に示した。「エントリーシートの準備は整っている」「就職活動中に判子を持ち歩いている」「面接練習歯積極的に行っている」については、得点の分布が低い方に偏っていた。一方で、「希望するし就職先に対して、自分の周りの人たちは賛成してくれている」「web より対面の方が実際の現場の風景や雰囲気を感じることがよくできる」は、得点の分布が高い方に偏っていた。

Table3 就活意欲に関する各項目の基礎統計量

変数名	有効N	平均値	中央値	標準偏差	分散	最小値	最大値
希望する就職先に対して、自分の周りの人たちは賛成してくれている	45	3.29	3.00	0.79	0.62	1.00	4.00
リクルートスーツを持っている	45	2.78	3.00	1.29	1.68	1.00	4.00
エントリーシートの準備は整っている	45	1.84	2.00	0.98	0.95	1.00	4.00
就職活動中に判子を持ち歩いている	45	1.62	1.00	0.98	0.97	1.00	4.00
服装自由と記載されているイベントでもスーツで参加する	45	2.29	2.00	1.14	1.30	1.00	4.00
webより対面の方が実際の現場の風景や雰囲気を感知することがよくできる	45	3.04	3.00	1.07	1.13	1.00	4.00
インターンシップは5日以上参加した	45	2.80	4.00	1.42	2.03	1.00	4.00
面接練習は積極的に行っている	45	1.38	1.00	0.81	0.65	1.00	4.00
SPIについて理解しているか	45	2.40	3.00	1.10	1.20	1.00	4.00

(4) 2つの尺度得点の基礎統計量

就活準備と就活意欲は、それぞれ 10 項目の平均得点を尺度得点とした。

Table4 2つの尺度得点の基礎統計量

変数名	有効N	平均値	中央値	標準偏差	分散	最小値	最大値
就活準備	45	2.18	2.10	0.45	0.20	1.10	3.40
就活意欲	45	2.38	2.33	0.57	0.33	1.00	3.67

2. 就活準備、就活意欲と心理的変数との関連

Table5 就活準備、就活意欲と心理的変数の相関

	就活準備	就活意欲
就職活動をするつもりはない	-.041	-.379 [*]
就職活動に関して好きや嫌いといった感情は湧かない	.056	-.060
就職をすることに対して前向きである	.292 ⁺	.256 ⁺
就職活動をしている自分が好きである	.357 [*]	.263 ⁺
就職活動に対しての不安が大きい	.060	.321 [*]
可能ならばまだ学生でいたい	-.283 ⁺	-.155
就職活動は憂鬱だ	-.229	-.365 [*]
就職活動に対してストレスを感じる	-.261 ⁺	-.247
友人の就職活動の進捗状況が気になる	.221	.109
就職活動は楽しい	.275 ⁺	.198

^{*} $p < .05$, ⁺ $p < .10$

就活準備、就活意欲と心理的変数の関連を明らかにするため、相関係数を算出した (Table5)。

0.3 以上の相関に着目すると、「就職活動をするつもりはない」「就職活動に対しての不安が大きい」については、負の相関が見られた。

一方で、「就職活動をしている自分が好きである」「就職活動は憂鬱だ」は正の相関が見られた。

考察

1. 各項目の得点分布から

(1) 就活準備について

今回の調査協力者は大学3年生が多かったため、就活に対する実感はあるが、漠然と就活を進めているという人が多いように感じた。それは、まだ将来やりたいことや進みたい就職先が定まっていないためこのような結果になったと考えられる。

(2) 就活意欲について

「希望する就職先に対して、自分の周りの人たちは賛成してくれている」では特に得点が高い方に偏っていたが、身の周りの人の賛成は、就職に対して背中を後押しするような形になると考えられるため、意欲に大きく関わっていると考えられる。

(3) 心理的変数について

「就職活動に対しての不安が大きい」「可能ならばまだ学生でいたい」「就職活動は憂鬱だ」「就職活動に対してストレスを感じる」は、得点の分布が高い方に偏っていたが、やはり就職活動をしなければいけないという焦りやプレッシャーと、学生でいたいという感情の板挟み状態になるため、就職活動に対して大きなストレスを抱える人は多いと考えられる。また、長年続けてきた学生という立場から全く別の社会人となり環境が大きく変わることに對する不安も大きく関係しているだろうと考えられる。

2. 心理的変数と就活準備、就活意欲の関連について

就職活動に意欲的である人ほど、就職に関することをネットなどで調べる機会が増えるため、不安やストレスが増えると考えられる。

意欲や準備に関しては周りの人の環境にも影響されると考えられるため、その人の友達がどの程度意欲的に就活を進めているかにも左右されると考えられる。

3. 限界と展望

本研究では大学生の就活事情というテーマで研究を進めたが、回答者は大学3年生に偏ってしまい。調査結果に偏りが出てしまった可能性があるため、大学3年生の調査結果と大学4年生の2つに分けて調査を行えば、2つの結果を見比べて考察できるため、さらに深く大学生の就活事情について研究できると考える。

参考文献

- 今泉 ちひろ・中島 聡美(2020). 就活ストレスによる精神的健康状態の軌跡に影響を与えるレジリエンス要因の検討 武蔵野大学心理臨床センター紀要, 1-13.
- 董 潔・前田 由貴子・川崎 友嗣・細越 寛樹(2020). 集団式の認知行動療法を用いた大学生の就職活動不安に対する予防的介入プログラムの開発と有効性の検討関西大学心理学研究, 29-37.